

# 中国60年代と世界

第2期第2号(通巻第9号) 2017.6.24

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

研究会報告 矢吹晋・朝浩之・今村純子・森瑞枝・土屋昌明…(1)／**霧反右運動の歴史的淵源とその深遠な影響** 申淵…(6)／**張春元「農民と農奴と奴隸」**…(20)／連載：『星火』字幕 最終回…(21)／書評：王友琴他『中国文化大革命「受難者伝」と「文革大年表」』前田年昭…(26)／蔵出し：武満徹「中国の時」…(27)

## 研究会報告

### 視点を地方の現場に移して、反右派運動の性格を再検討

2017年4月27日(木)19時から21時まで、専修大学1号館5階セミ室で、本年度第1回の例会がおこなわれた。研究発表は、土屋昌明による「反右派運動の研究史と現在の問題」、参加者は、矢吹晋・朝浩之・今村純子・森瑞枝であった。

発表では、反右派運動の経緯と毛沢東の考え方に関する研究のいくつかをとりあげて吟味。そのあと、毛沢東がどのようにして反右派運動をおこなうことに至ったか、という問題もさりながら、現実には毛沢東の考えや指示が現場でどのように解釈され、どのように実行されたかをもっと研究すべきであり、それには、右派の経験者の自伝や回想録、インタビューのドキュメンタリーフィルムなどを活用すべきであるという提案がされた。

その典型的な材料として和鳳鳴の『経歴—我的一九五七』(敦煌文藝出版社、2006年第2版)および彼女へのインタビューを構成した王兵監督のドキュメンタリー『鳳鳴—中国の記憶』(2007年)が例示された。このドキュメンタリーの一部、とくに57年5月から6月における中央ないし党内での反右派の動向と、甘粛省蘭州における党批判の懲憲およびそこから反右派に転じる動向との時間差が表現されているシーンが上映されて、この時間差の問題が具体的に論じられた。

討論では、毛沢東の発言として使われている『毛沢東選集』第5巻の資料としての限界が指摘された。この資料は、華国鋒によって編纂されたもので、編纂の狙いに偏向があるばかりか、テキストそのものに手を加えている(それは本書の序文でも公式に認めている)。そして、これをクリティークできる信

頼すべきテキストが公開されていない。比較的参考になるのは、紅衛兵によって編集された『毛沢東思想万歳』の諸版に載せられたテキストである。

また、研究の一例としてあげられた竹内実氏の推理は、毛沢東に対する竹内氏の個人的な見方を反映している可能性があり、竹内氏の毛沢東観をふまえたうえで検討すべきだ、という意見が出された。反右派運動の地方の現場を見るべしとの提案に対して、それに同意しつつも、当時の毛沢東の考えは、国際関係などを考慮することによって、日本の現状の研究をより一歩深めることが可能だろうという観測が示された。

以下に、参加者のコメントを載せる。

(敬称略、文責・編集部T)

### 犠牲者視点から再考との観点に意義

矢吹晋

土屋報告は、反右派運動の犠牲者たち(たとえば林昭、蘭州大学星火グループ)の視座から中国現代史を再考する観点が明確である。管見だが、そのような観点から毛沢東を論じたものはほとんどなかったように思われる。その角度から反右派運動を読み直すと、日本の研究者たちの欠陥あるいはデタラメぶりが浮き彫りにされる。

土屋はここで、割合広く読まれている本として、天児慧著『中華人民共和国史』(岩波新書、2013年新版および1999年旧版)の記述を検討する。天児慧は、毛沢東がいわゆる第三段階で見解を変えたとする従来通説に依拠して、①フルシチョフへの反作

用を重視し、②当初からたたく、という張戎説を併記したものと理解して、特に後者の解釈に異論を提起している。

土屋が明記したわけではないが、土屋の天児に対する違和感をよく理解できる。もし毛沢東が最初から悪意をもって争鳴を呼びかけ、これに答えて発言した知識人たちを右派分子として摘発した、これが真実ならば、毛沢東の甘言に乗せられた林昭たちは、なんともナイーブなおばかさんになってしまう。事柄はそれほど単純ではあるまい。

天児は「最近のいくつかの内部文献など」から見ると、「最初からたたく意図をもってあぶりだし、反撃する冷徹な策略」などと、新版でも旧版でも繰り返し返しているが、これについて土屋は、「二〇一三年版にいう最近」と「一九九九年版にいう最近」とは、何を指すのか。十四年も異なる時間差を「最近」と書くことは許されるか、と皮肉っている。然り。この箇所は天児の杜撰を象徴する。「いくつかの内部文献」という記述も曖昧だ。具体的に特定してくれないと論評できないではないか。天児が張戎の『マオ』（講談社、2005年）を褒め挙げたとき、私はアンドリュー・ネイサン（Andrew Nathan）の書評を援用して、『マオ』のデータメダラを指摘したが（矢吹『激辛書評で読む中国の政治経済』日経BP、2007年所収）、これらの批判をすべて無視して、天児は謬論を繰り返している。

さて、土屋はもう一人の論者として竹内実『毛沢東』（岩波新書、1989年）をあげる。竹内によれば、「百花斉放、百家争鳴」はそもそも毛沢東の発想ではなく、劉少奇、陸定一らの思想である。毛沢東は終始これに批判的であり、当初は容認し、後日逆手

にとってこれを批判したものと解する。私は竹内の毛沢東詩詞の解釈を高く評価するが、政治問題についての短絡解釈には賛成しかねる。

土屋は、これら二人の日本人研究者と並べて、アメリカの中国知識人研究者ゴールドマンの『毛沢東の秘められた講話』（岩波、1993年）を対比させ、毛沢東が官僚主義と官僚の特権化を問題にしたのは、文革と共通する発想だと指摘している。

M.ゴールドマンは、ハーバードで学び、シュオルツやフェアバンクの弟子として終始中国知識人を研究してきた第一人者である。毛沢東の知識人論を語らせたなら、彼女以上にこの主題を論ずる資格と能力をもつ研究者はいない。

さて土屋の報告に戻ると、彼が林昭や星火グループ等の犠牲者たちの思想と弾圧を命じた毛沢東の論理とを複眼的に分析しようとしていることは高く評価したい。それによって中国共産党というヒエラルキーの「トップ（の試行錯誤）と末端（割当数を1割と決めて右派分子をデッチ上げる）」の認識がどのように交錯しつつ、中国現代史が展開されたかを知ることができる。さらに毛沢東自身の思想あるいは発想について「毒草と香草」の弁証法に注意を向けているのも、面白い。毛沢東が「百花斉放、百家争鳴」の八文字を「中国2000年来の人民の知恵だ」として、これを呼びかけて「放」させ、転じて「収」に到り、毒草を刈る。毒草とされた側からすれば、たまったものではない。しかしながら、中国革命の成功も失敗も、毛沢東のこの発想に深く刻印されているから、これに対する理解を欠いては、問題の核心に迫れない。

#### 付表・反右派闘争のとらえ方

	第一段階 1956年2月 スターリン批判と毛沢東の対応	第二段階 1956年9月 党八全大会	第三段階 1957年6月 『人民日報』社説「これは何か」
天児、 2013	ソ連との違いを明示しようとして「十大関係論」	毛沢東思想が削除され、集団指導体制が強調された	最近のいくつかの内部文献などから見ると、最初からたたく意図をもってあぶりだし、反撃する冷徹な策略
竹内	争鳴は毛沢東ではなく、劉少奇・陸定一らのアイディアだから、	毛は劉・鄧らの言論を開放させて、逆手にとる	第二段階の帰結として反共言論を抑圧するが、土屋の評価によ

1989	毛沢東はこれに消極的		れば「これは第二段階の延長であり、毛沢東が変化したわけではない」
ゴールドマン、1993	知識人を使うために、知識人統制を緩和しようとした	1957年2～4月の毛の講話は官僚批判を促した。毛の官僚主義批判は文革と共通する。ここでは非暴力的、文革では暴力的、批判を行う「方法の違い」にすぎない [土屋はこれを傾聴すべき視点と読む]	
土屋の批判と評価、2017・4	毛沢東はこの時点で反共分子を「たたく意図をもっていなかった」「批判的人士を許容することでスターリンとの違いを明示しようとした」と読み、天児を批判		天児説は「従来の説 [第三段階で毛は意見を変えた] を基礎として、①フルシチョフへの反作用を重視し、②当初からたたく、という張戎説を併記したもの
『万歳』に依拠した矢吹の三段階	第一段階、1956年1月26日知識分子問題についての講話の後 [56年2月にフルシチョフによるスターリン批判があり]、56年4月政治局拡大会議で初めて争鳴を語る。「在芸術上百家斉放、学術上百家争鳴、応作為我們的方針、這是兩千年以前人民的意見」(万歳丁 38頁)。56年4月25日「十大関係」論ずる	第二段階、1957年2月27日、前年4月の「十大関係論」を練り直して、人民内部の矛盾講演。人民内部の矛盾を正しく処理しなければ、敵対矛盾に転化する。3カ月後すなわち6月8日、毛は「敵対矛盾に転化した」と判断して反右派闘争に転じた	第三段階、1957年6月8日毛が「これは何か」と題して『人民日報』社説を書く。反右派闘争始まる

## 実行時、現場の事情反映との指摘に刮目 朝浩之

土屋氏が「……毛沢東の思想と行動が主因ではあるが、それが実行されるときに、地方の現場の事情が反映されることを認識すべき」とされたことに、反右派運動の核心に触れた思いがした。過去の歴史事件を論じることの今日的意義もそこにありそうだ。

翻って、当時の日本において反右派運動はどのように捉えられていたかも気になった。『講座中国』(筑摩書房)の「Ⅲ革命の展開」(1967年10月)では巻末年表に57年6月「反右派闘争始まる」と、『講座現代中国』(大修館書店)の「Ⅱ中国革命」(1969年9月)でも巻末年表に57年6月「丁玲、反党集団として批判される」「右派 [章伯鈞や羅隆基] の文字改革派に反撃」などと記されているが、両書とも本文

中に目立った記載はない。私自身はというと、中国研究会のレジメなどから類推するに、1951年の「武訓伝」批判、54年の紅樓夢論争、54年の胡風批判、56年の百花斉放・百家争鳴運動、そして丁玲批判といった流れの中で、建国後の文芸整風といった問題意識に重きを置いて、過渡期における知識人の動揺に対する毛沢東による教育・反撃と見ていたのではないかと思う。つまり、衝撃的だった文革に集約されていく思想闘争という側面に目が向き、それが党の末端にどのように波及したのか、就中、日常生活にどのような影響を与え、何が起こっていたかについては関心が向かなかったということになる。

思うに「人民内部の矛盾を正しく処理する」(1957年)とは毛沢東自身のブレ(内部矛盾)の表出とも言えるのではないか。双百(百花斉放・百家争鳴)運動に反右派運動が仕込まれていたといった見方は、事象の表層をなぞるだけのものであり、歴史に学ぶ

という姿勢には遠いものだ。経済成長だけを見て、それを生み出した改革開放政策に舵を切るまでの歴史を無視する言説も同根のように思う。

## 『鳳鳴』は感性で反右派闘争を捉えている

今村純子

門外漢ながらはじめて参加させていただいた。知識不足で、土屋先生のお話ははじめて耳にするものが多かったが、お話のさなか、王兵監督『鳳鳴（フォンミン）——中国の記憶』の様々なショットが思い出され、改めて、王兵はドキュメンタリーの天才だと思った。知性より前に感性の次元で、反右派闘争とはいかなるものかを感じしうるのだ。端的には言語化できない様々な矛盾の襲が、一個人から党の有り様まで類比的に伝えていくように思われた。他方で、王兵が本来やりたかった劇映画『無言歌』は、その悲惨さという「事実」しか伝えておらず、己れの資質というものはなかなか自分ではつかめないものだとも思った。

## 議論のためには用語の整理が必要では

森瑞枝

独裁を貫徹するためのシステムであるはずの官僚制、独裁を妨げる官僚制、大民主を実現するために官僚制打破をすすめる毛沢東独裁。局面ごとの毛沢東の射程をめぐって議論されているのだが、用語の喚起するイメージが混乱して、なかなか腑に落ちない。

例えば「独裁」。それぞれの局面での独裁は、人民独裁、プロレタリア独裁、共産党独裁、毛沢東の独裁などを指すが、オーバーラップしつつ離反しあう。では独裁とは？

例えば「官僚主義」。古典中国の官僚、近代国家のテクノクラート、社会主義国家のノーメンクラトゥーラ、それに役人、官僚主義の内実にも幅がある。形式主義と胸下三寸、職権乱用。さらにそこに「民主」が絡む。それぞれの局面のなにをさして独裁、官僚主義、民主というのか、中国現代史の議論の場を展くには、用語の整理が必要ではないか？

## 例会発表を終えて

土屋昌明

例会当日朝、班忠義さんから論文が一つ送られてきた。発表では、この一部を翻訳して、レジュメにとりこんだ。それは、沙尚之・陳愉林（ペンネームは申淵）「試論反右運動的歴史溯源和十大研究課題」（2017年3月）という論文であった。彼らは反右派運動当時の浙江省杭州の諸文献を特殊なルートで閲覧しており、それによる認識にもとづいて反右派運動を議論していた（本誌予稿はこの論をふまえる）。

フルシチョフの秘密報告が反右派運動に影響した点は、私の発表で指摘したような研究が日本では定説となっているが、この論文によれば、いまだに議論の余地ありとしている。つまり、反右派運動の起因はハンガリー事件だったのか、フルシチョフの秘密報告だったのか、あるいは百花斉放政策の予想外の盛り上がりなのか、さらに深い社会的政治的淵源があるのか、偶然だったのか必然だったのか、という問題は、いまだに解決していないという。

この点、この論文がスターリンに対する毛沢東の対抗意識を指摘しているのは考慮すべきかもしれない（本誌予稿の7ページを参照のこと）。つまり、新中国は共産党だけでは成立しえないことをスターリンが指摘したのに対して、毛沢東はそれをなんとか否定したい、共産党独裁にすぐにも移行できるし、そうすべきだと考えていたようなのである。このような動機が反右派運動へと接続したとみることも可能なのである。

またこの論文では、ハンガリー動乱がどういう意味で毛沢東に反作用をおこさせたかも問題としている。たんに民主化運動がおこったから、その主体たる知識分子を抑圧しておくべきだと毛沢東は考えたわけではないようだ。毛沢東は、ハンガリー事件が起こった原因を考えて、その原因を取り除く方法として、知識分子に対する警戒をしたようである。それは、彼にとってハンガリー事件は、個人崇拜と階級闘争を否定したところに原因があったと思われたからだ。

このように、本論文は示唆に富んでおり、今後い



っそうの吟味が必要である。

地方の反右派運動の状況についての資料として、宋永毅編『反右絶密文件：中共中央弁公庁 情況簡報（整風專輯）彙編』全12巻（国史出版社、2015年）、『千名中国右派処理結論和個人檔案』全6冊（国史出版社、2015年）、『中国反右運動教拋庫』（香港中文大学、2010年）を示しておくべきであった。

反右派運動へのプロセスの認識では、往々にして、

百花斉放・その推進・逆転＝反右派運動という単純化がおこなわれている。しかし、1956年から57年の2年間には、世界情勢にせよ中国情勢にせよ、非常に大きな事件が連続しておこっているのであり、しかも運動は全中国で進められたのであるから、より緻密な議論がおこなわれてしかるべきであろう。

（つちや・まさあき、本会幹事・専修大学教授）

#### [25 ページからのつづき]

に知らせる。  
 1960年3月 このころ武山県だけで1万人以上の餓死者が出ていると杜映華らが認識。  
 1960年4月 顧雁、張春元、苗慶久が上海南匯瓦硝公社黒橋の顧雁のところに集まり、『星火』を中共の最高指導層に発送することを議す。また張春元の「論人民公社」が出来たら、印刷して全国の公社書記以上の幹部に配布することを議す。この頃、蘭州大学歴史系の右派学生で張春元の同窓の陳幼達が甘肅の公安に、張春元、譚蟬雪、孫和らの行動が疑わしいと密告。  
 1960年5月2日 鄭連生、柴志徳が武山県公安局に張春元、譚蟬雪、孫和、向承鑑、苗慶久ら15名が反革命組織を作っていると密告。  
 1960年5月 香港の人士の協力を得ようと、親戚を香港に持つ譚蟬雪が広州から香港に密行を企図、深圳で捕まって広東省開平で労働教育となる。  
 1960年7月 張春元は譚蟬雪の救出をはかり、身分証明書を偽造して開平に入る。偽造が発覚して捕まる。張春元は向承鑑に電話、「母親が伝染病になった」。  
 1960年9月30日 向承鑑・杜映華ら武山のメンバーが一斉検挙。  
 1960年12月 党中央による西蘭会議、甘肅の応急的な救済をはかる。  
 1961年7月末 張春元が苦肉の計で労働改造病院に転移。

1961年8月10日 張春元が労働改造病院を脱出。  
 1961年9月6日 張春元が逮捕。貢元巷看守所へ。  
 1962年 張春元が天水市第三監獄に移る。手錠と足枷を受ける。  
 \* \* \* \* \*  
 1964年 天水の監獄にいた杜映華は、刑期満了を控えながら、同じ監獄にいた張春元に密かにメモを渡して出獄後について相談、張春元は毛沢東とマルクスを読んで中国の現実に対処する学習をするように返信。このメモが発見され、杜映華と張春元は後に再審で死刑とされる。  
 1965年1月 天水グランドで張春元、譚蟬雪らに対する万人裁判大会が開かれる。  
 1967年1月13日 「公安六条」発布、毛沢東・林彪を悪く言う言説は処罰される。  
 1968年 上海の監獄にいた林昭が死刑となる。  
 1970年 張春元と杜映華が死刑となる。  
 \* \* \* \* \*  
 1973年 譚蟬雪が出所して酒泉で労働改造。  
 1979年 『星火』関係者は「中央55号文件」によって名誉回復を申請したが、天水裁判所は審査後に原判決のままとした（再審者は原判決をした当事者だったという）。後に、甘肅省の高等裁判所が再審チームを作って検討後、ようやく名誉回復を得た。

#### [20 ページからのつづき]

ていくのは、必然であろう。そして、自然発生し今や成長過程にある農村プロレタリアートは、消極的かつ隠微なかたちで反抗しているにもかかわらず、現代の統治者の残酷な報復に遭っている。いま広範囲の農村で「反右傾運動」が進んでいる。それは農民の苦しみに同情した者を痛めつけることだ（やられるのは主に農村の基層幹部である。彼らは農民の家庭出身あるいは自身が農民で、農民と色々な親和的關係があり、しかも大部分は農村の党員である）。このような高圧的政策を実行した結果は、広範囲の農村プロレタリアートを最終的な覚悟へと追いやり、現代の統治者の孤立を促進するだけである。

いま全国的にみると、いまだ大がかりな農民革命運動が惹起する可能性はないが、星のまたたきのごとき燎原の火は、すでに局地的に燃え始めている。運動の深化と発展につれて、この燎原の火は、必ずや燃えれば燃えるほど高まり、全国を席卷するであろう。この農民運動の烈火が起これば、あれら「社会主義者」「労働者農民大衆の代表者」と自称する者どもが、毛ほども残らず、つゆほどの原形も見えぬほどに燃やされ、最後には労働者農民による歴史の大車輪に蹴散らされ、はるか遠くに打ち捨てられるのは必定である。 ☆

公開研究会（2017年6月24日）発表予稿

## 反右運動の歴史的淵源とその深遠な影響

申淵（訳・土屋昌明）

1949年に中共が政権を奪取して以来、1976年に毛沢東が逝去し、四人組が粉碎されるまでの27年間で、中共は大小55回、年平均2回の政治運動を發動した。こうした運動における非正常死亡者は8000万人にのぼり、それまでの戦乱と災害による死亡者をしのぐ数である。1989年の六四事件前にあった資産階級思想自由化反対運動および六四学生民主運動に対する弾圧では、死亡者は10454人を数える。中共の執政後、今に至るまで、階級闘争を綱領とする政治運動は57回おこなわれている。六四以後、表面的には政治運動をおこなっていないようだが、階級闘争は依然として中共執政の主軸である。いわゆる穏健的な手段というのは、階級闘争の変種に他ならない。

この57回の政治運動においては、1957～1958年の資産階級右派分子に反対する運動および1966～1976年のプロレタリア文化大革命運動、さらに1989年の六四学生民主運動が主たるものである。これらの発生、その重大な結果には、歴史的な共同性と継続性がある。これらの運動にはそれ以外の運動との相互関係もある。

中共当局はこれら三つの運動に対して異なる態度をとっている。反右運動には半否定をしている。つまり「改正」であり、中途半端な態度をとりつつタブー視し、議論することを許していない。文革は全面否定するが、自分たちが語ることは許しつつ、異論を認めない。六四民主運動については、全面的に封殺し、名誉回復も議論すらも許していない。

### 第一部分 反右運動の歴史的淵源

反右運動は60周年を迎えた。それは中共建国以後、全国の都市の各階層に波及した極めて影響重大な政治運動であった。その対象は主に民主人士・文化芸術界・党政幹部・学生などの知識分子であった。この運動の発生と経緯については、すでに多くの研

究成果が発表され、この運動が数多くの優秀な思想家や社会的エリートを夭折させ、言論の自由を奪い、中国の近代化を大きく阻害したことが証明されている。今日、この問題を研究するのは、優秀な思想家の先達を記念するためのみならず、この運動の発生原因と、現代中国に対するその大きな教訓的意義をより深く理解せんがためである。

本発表は、沙文漢と陳修良の資料を参照するが、それについて簡単に紹介しておこう。沙文漢と陳修良（沙尚之の父母）は、いずれも1920年代の革命時期の党員であり、学生知識分子出身で、長期間、都市の地下闘争に従事した。解放前、父親〔訳注：沙文漢〕は、中共中央上海局で宣伝・文化・統一戦線および内通工作をおこなった。母親〔訳注：陳修良〕も長いあいだ、都市の地下革命運動に従事し、首都部中共の地下時期における南京市委員書記を担当していた。反右運動のとき、彼らはともに浙江省で働いており、父親は省長の職にあり、母親は省委員会宣伝部副部長の職位にあったが、二人とも党内右派とされた。彼らは20年あまり後にやっと「改正」を得たが、「平反」（名誉回復）ではなかった。その理由は、鄧小平が言ったように、反右運動は必要かつ時宜にかなっていたが、「拡大化」したにすぎないからであった。

彼らは、歴史に対する畏敬と深い反省の念を抱きながら、後世にプライベートな文書を何千頁と残した。そのなかには、浙江省内外の反右運動の史料が大量に含まれているのみならず、多年にわたる仕事のメモや書状・講演録・文章・運動において受けた批判の記録・検討書・自伝・履歴書・口述筆記・経験した事件の回想・冤罪となった友人の史料・収集した各種の史料・雑誌などがある（以下「文檔」と称する）。彼らのむすめである沙尚之の、数十年にわたる、これら「文檔」の整理と閲読を通して、私たちは1990年代〔訳注：「文檔」が検討されていた

時期] から1920年代へ、あるいはモスクワや東京から、新四軍の根拠地へ、上海・南京・杭州へと時空を超えるような感覚にとらわれる。先人が諄々と説いた経験は、後世に対しても多くの問題と思索を示してくれる。

これらの「文檔」は、後世の人々に現代中国の真実の姿を見せてくれる。それらは、反右運動の原因と性質を理解させてくれるとともに、より広い視野を提供する。つまり、今日、反右運動を考えるには、1957年前後の状況を理解しなければならないのみならず、1957年という時間的段階をとびこえて、建党・建国の初期段階にまでさかのぼるべきなのだ。また、中共の歴史を研究しなければならないのみならず、ソ連共産党およびコミンテルンの歴史を研究して、はじめて反右運動発生の内生的原因およびその法則と重大な結果を認識できるのである。こうした系統的な考察と探究を欠いては、反右運動の性質を深く理解し、そこから歴史的な教訓を汲み取ることはできないだろう。

### 一、反右運動が示した歴史的なコントラスト

歴史を回顧すると驚くべきことに気がつく。抗日時期に党は「大量に知識分子を吸収する」として、文化人や青年インテリに延安へ行って革命に参加するよう慫慂した。40年代、中共は蒋介石の「一つの党、一つの主義、一人のリーダー」というファシズム独裁に公開で反対を提示し、複数政党による民主を要求、専制に反対した。毛沢東は、はっきりとこう言っている。「プロレタリア独裁は、われわれには必要ではなく、それを実行することもない」と。劉少奇は「共産党が政権を奪取したら、共産党の一方独裁を樹立しようとする、というのは、悪意あるデマであり侮蔑である。共産党は国民党の一方独裁に反対するが、共産党の「一方独裁」を樹立しようとはしない」。

『解放日報』にはこうある。「民主政治を推し進めるのに肝要な点は、一党政治を終わりにすることにある」(1941年10月28日)。さらに『新華報』は、民主を要求し、独裁の終了を望む文章を大量に発表した。それは近年、『歴史的先声(歴史のさきがけ)』という単行本として編集出版されている。党と政府

との関係においては、董必武が次のように言っている。「政府に対する党の指導は、形式的には直接的管轄ではない。党と政府とは異なる二種類の組織系統であり、党は政府に対して命令できるわけではない」(『董必武文選』)。こうした主張は、国民党統治区の人々と国際社会の広範な人々の認めるところであり、トルーマンにすら認められた。これは、国民党政府を倒す上で、政治的に非常に大きな影響力を生んだ。とくに、左翼民主人士・文化人の参加は、国民党の独裁政府に反対する「中間勢力」としての中共にとって、最終的には蒋介石政府に対するアメリカ政府の信用と支持を失わせるのに役だった。「文檔」には、当時における都市闘争で重要な作用を及ぼした左翼文化人・知識分子・民主人士・各界の著名人・学生・工商業従事者・公務員・会社員・労働者・反乱した国民党の軍政関係者などの、さらに中共で都市工作に従事していた党員(俗にいう「地下党」)組織の指導のもと、おこなわれていた公開・秘密の闘争に関する大量の事蹟が記載されている。1949年の建国後、彼らは、遂に解放を迎えた、独裁と専制政治を脱した、人民の民主主義の実現に着手できる、富国富民の理想を実現できる、と狂喜乱舞したものだ。われわれは当時、こうした見誤りを信じ込み、熱狂的に共産党を擁護し、革命に参加したわけである。

毛沢東が北京に入城した前後の言論の変化は、この謎を解き明かしてくれる。1947年11月30日に毛沢東はスターリンに電報を打った。「中国革命が徹底的に勝利をおさめたあかつきには、ソ連やユーゴスラビアのように、共産党以外の政党はすべて政治の舞台から去るべきであり、かくして中国革命は大いに堅固なものになるであろう」と。スターリンはすぐに返信を打って異議を呈した。「中国人民解放軍が勝利をおさめたあとの中国政府は(政策的に見て、どの程度続くのかはまだ確定するのはむずかしいが)、民族革命の民主政府であり、共産主義の政府ではないという点を考えておかなければならない」と。毛沢東は、中共第七回全国代表大会(訳注:1945年4月~6月)の段階で、「建国後に政権を掌握したならば、われわれの闘争対象は民主人士となるだろう」と述べていた。1947年に毛沢東はある「批

示(コメント)]でこう書いている。「蒋介石打倒後には、自由資産階級、特にその右翼勢力がわれわれに反対するから、政治的に彼らに打撃を与え、群衆から孤立させることは必須である」。この指示から10年の1957年に、知識分子に対する刃がふりおろされたわけである。

1957年の反右運動には歴史の奇怪さがうかがえる。中共と同様な言論と要求が、典型的な右派言論とされた。かつて国民党をひっくりかえした、都市闘争で最も力を発揮した前述の「左派の人々」が、党内外の「右派分子」の主体となったのだ。これは偶然だったのだろうか？ 前後10年の時間にすぎず、歴史の悠久からすればほんの一コマの時間に、革命していた者から突如として反革命に変わるという大きなコントラストが生じるのは、驚くべきことだ。当時、浙江では、何十年ものベテランである、国民党地区闘争の指導者だった沙文漢・楊思一・陳修良はもちろんのこと、著名な左翼民主人士である宋雲彬・李士豪などが、すべて右派とされた。こんなことがあり得るのか？ これもまた当時の多くの人々が理解できないことであった。当事者以外でも、理解できないゆえに右派と「けじめをつける」ことができず、やはり右派とされて、中国現代史の悲劇をくりひろげた者もいた。

建国後の8年に党内外のこうした派が突如として右派にされたことを考えると、彼らの多くは、社会で一定の地位にありながら、民主的理想を追う初心を忘れず、この点では変化していなかったことに気がつく。最重要な変化は、中共主流の執政者が、在野から執政する立場に変わり、利益と立場が大きく変わって、奪権に勝利したと同時に、天下を治めるという、もう一つの偽りのない初心を取り戻した点である。これによって形成された歴史のコントラストはこうだ。在野のときに激烈に反対したことの多くには、いまや賛成である(例えば一党独裁)。在野のときに熱烈に賛成したことには、いまやすべて反対である(例えば民主運動を展開すること)。こうした倒置現象については、一種の歴史的「鏡像的」変化というべきだろう。まさしく、鏡の中では自分の「左」と「右」が正反対になる。驚くべきことに、政治的人物もそうなのであり、権力的地位につくと、

利益に駆られて、鏡の外が鏡の中に変わり果て、「左右倒置」現象をもたらすのだ。

ソ連共産党から中国共産党の影響関係を考えるような、より広い視野から遠近法を使いつつ、反右運動という歴史的なコントラスト現象が起きた原因を考察したい。

## 二、反右運動が起こった政治的原因

中共の成立と建国は、2度の世界大戦ののち、国内外の形勢が激烈な変化をしている影響下でおこったことであった。したがって、こうした大局を見逃し、中国国内だけを見るのは、視野狭窄に陥る。20世紀初頭、辛亥革命が清朝を打倒したあと、軍閥の混戦がおこり、中国社会は、近代から現代社会に転じるはじめにあった。国際的には第一次大戦が終結し、各国の勢力があらためて分割されつつあった。なかでも、中国の隣邦であるロシアで、1917年10月に革命が勝利をおさめたことは、中国への影響が甚大だった。五四運動以後、「ロシアの道に進む」ことが急進的な革命家の選択となり、熱情的な青年革命家たちは、中国問題を解決する最終的な解答を得たのだから、この準備のために終生奮闘しようとかたく信じて疑わなかった。しかしながら、ソビエトは資本主義が最も発達していなかったロシアで発生し、農奴の伝統がある皇帝制度のなかで打ち立てられた。中共がロシア革命の経験を全面的に受け入れると、ロシアの社会文化的な特徴の多くが、遺伝子のごとく、中国という、より遅れた農民主体の国家の政党へと受け継がれた。こうした遺伝子が、五四時期の民主と科学の啓蒙に取って代わり、その後100年にわたる中国社会の発展をねじまげたのである。

歴史をふりかえると、中共は少なくとも以下のようなくつかの「政治的遺伝子」をロシア革命から受け継ぎ、中国の特徴と結合させ、伝承しつつ今に至っていると指摘できる。これこそ反右運動を招いた原因である。

### 1、高度に集権的な専制政治制度。

1920年代にソ連共産党によって成立した中共は、はじめから「コミンテルン」(スターリン指導下のソ連共産党が操っていた)の強力なコントロールを



受けた支部であった。「文檔」によれば、中共は建党後20年近く、事実上は独立した政党ではなかった。経済的な経費を除き、軍事的な経費はソ連共産党（コミンテルン）が長期にわたって資金提供した。それ以外、政治的には言うまでもない。党の行動綱領、政策ないし第六期七中全会（1944年5月21日～）以前の歴代の中央書記の罷免・推挙・交替は、すべてコミンテルンの直接的なコントロールによるのである。たとえば1920から30年代、国共合作、北伐への参与、「四・一二」以後に武漢の汪精衛政府支持から「非資本主義路線へ」に至るまでのこと、「馬日事変」の発生に拍車をかけたこと、陳独秀書記の解任、瞿秋白と李立三を罷免して向忠発を総書記としたこと、第六期四中全会の召集、王明と博古を指導的地位にする決定、羅章龍の罷免、国民党の手によってコミンテルンの路線に反対する中共の優秀な革命先駆者を逮捕処刑させたこと（たとえば、上海龍華烈士の代表的人物である何孟雄らの東方旅社事件）、これらはすべてソ連共産党の主導からもたらされた。中共の建党後、コミンテルンは、実際をかえりみず、ストライキや暴動・武装奪権といった左傾路線を強行に貫徹するよう求め、多くの優秀な人々を無駄に犠牲にした。30年代中ごろ、都市の党組織は完全に崩壊し、ソビエト区は幾度も包囲されることとなり、「コミンテルン」派の指揮は最終的に失敗、長征を迫られた。以上のすべての失敗は、ソビエト共産党が政策決定の責任を負うべきものである。抗日戦争中、中共は一度は「ソビエトを守れ」を中国人民の抗戦のスローガンにした。七君子の一人である王造時、日ソ不可侵条約に抗議する手紙を起草して迫害を受けた。「文檔」によると、中共は建国後さらに「一辺倒」となり、ソ連の政治・経済・文化・社会管理のやり方を導入、まさしく「全面ソ連化」であった。今日に至るまで、中共の全国挙げての統治モデルはソ連の影響を脱していない。

こうしたやり方は、多くの党員や幹部の抵抗を受けてきたものの、中共はソ連共産党の「鶴の一声」をきき、指導者の専制を主たる「党性」の標識とした。かくして、民主を実行する伝統は途絶し、かたくなに樹立された「民主集中制」、じつは中央に「集中」させること、つまりソ連共産党の言うことを聞

くことがおこなわれた。そうでなければ、必ずや党とプロレタリア独裁に反対する敵とされるのである。ソ連共産党の専政主義の伝統とわが国の千年来の皇帝権力および家父長制が融合し、中共組織の核心的準則を形成した。指導者が替わっても、この原則は変わらない。1957年に多くの右派が複数政党制を要求したが、これはもちろん「反党」である。当時、これが基層にまで拡大され、「第一書記に反対するのは反党だ」となり、「民主」を主張することは、「プロレタリア独裁を否定することだ」となった。しかし、これらすべては決して1957年に生まれた新しい単語ではなく、専制的な独裁という政治的遺伝子が必然的にもたらした論理なのである。1958年の反右の余波では、党外から党内へ、下層から上層へと重点が移った。毛沢東は17カ所の都市を密かに訪ね、13級以上の高位の幹部285人、十大省部級の右派反党グループを選び出した。

2、法制的否定、人治の尊重、「路線闘争」「階級闘争」を名義に、「反党」というレッテル貼りによって党内のセクト争いを解決させ、党内外の異なる意見を抑圧すること。

これももとはソ連共産党の伝統的方法であった。専制を実現するには、異なる見解を消し去らねばならない。これについては、つとにメンシェヴィキとボルシェビキの死闘があった。「文檔」によれば、1920から30年代、ソ連共産党の指導を受けた路線闘争が多くおこなわれた。たとえば、反トロツキー闘争、反右派、反ブハーリン、反労働者反対派、反ジノヴィエフ、30年代の大規模な清党、肅清などだ。政治的レッテル貼りが流行し、大量の「反対派」「異見者」が殺された。「文檔」には、陳修良が当時、モスクワで目にした、党内のいわゆる「28人のボルシェビキ」のセクト闘争で、たくさんの中国人学生が巻き込まれたことが記されている。その基準は人を以て境となす、である。王明の「支部局派」を擁護するのか、それとも俞秀松・董亦湘の「教務派」を擁護するのかを見るのである。モスクワ中山大学における闘争では、有りもしない「江浙同郷会」事件が捏造された。「文檔」によれば、中国人留学生が「トロツキー派」にされたり、各種のレッテルを

はられ、シベリアに送り込まれたり、「失跡」して帰って来なかったことが記されている。著者はこのため、当初モスクワを聖地とみなしていた気持ちが変わり、ソ連共産党に対する「懐疑・不満」が生じた。これがまた、この著者の「反ソ」という右派とされる罪の種子にもなる。

こうした清党と粛清のセクト主義路線の闘争方法が、親ソ連共産党の中共指導者によって必勝法として中国にもたらされ、党内セクト闘争で異見を排除する常套手段とされたのである。1930年代に都市の党組織が「左」傾路線によって壊滅的になったとき、ソビエト根拠地も同様に、コミンテルンの指導による恐るべき紅軍粛清をおこなった。たとえば、反AB団、反改組派、反第三党、反トロツキー派、反紅旗党などだ。江西・湘鄂西・閩西などの根拠地では、知識分子を大いに批判・殺害し、根拠地のなかには、「眼鏡をかけている」者ならつかまえて殺してもかまわないところもあった。法制は不要であり、人治だけ、およそ革命の名の下であれば、少数者によって処遇が決められた。これこそ、十月革命後のソ連共産党のやり方である。1940年代の延安の整風では、大いに「抢救運動」をしたが、康生が使用したのは、まさにソ連共産党のこの方法であり、これで多くの文化人が整理された。これは周知の歴史であるが、このやり方がおのずと1957年の反右運動でおこなわれたのは、怪しむに足りない。

反右運動において、中共の省級幹部が多数打倒されたが、これにも何ら法的根拠はなかった。「文檔」によれば、浙江省における反右運動は、省委書記の江華、華東局書記の柯慶施らによる画策と候補者選定のうえ、毛沢東による首肯のもとに進められた。1957年12月、浙江省第二期二次党代表大会の期間、浙江の事件を全国の党内反右の標準的な典型とするために、毛沢東は杭州に1ヶ月あまり滞在し、みずから幕後から口出しし、あわせて『人民日報』の浙江党代表大会の社説発表を修訂させた。それはおもに、階級闘争・路線闘争を目下の主要矛盾として突出させるためであった。したがって「八大関係論」で主たる矛盾は経済文化建設にあるとした説を否定し、機に乗じて反右運動を党外から党内へと転じさせて、党内の一群の右派たちを整理しようとしたのだ。

中央が浙江省委の沙文漢・楊思一・彭瑞林・孫章録を「右派集団」と認定しようとしたとき、鄧小平が厳しく指摘した、「党内右派は党外右派よりさらに危険だ」と。すなわち、浙江省委のこの闘争を強く肯定したのである。つづいて1958年上半期に全国各地で省部級の党内右派があいついで引きずり出された。各地の方式はすべて、会議を開いて、ある人々が指名された上に「右派」のレッテルを貼られ、そののち無慈悲な闘争会がおこなわれ、法律を待たず適宜に逮捕・家宅搜索・労働改造・辺境への移住がおこなわれた。甘肅の夾辺溝は、なかでも有名な右派流刑地である。このような「路線闘争」のやり方は、完全にソ連共産党の政治的遺伝子を承けて発展させたもので、その共通の前提は、個人崇拜をもたらし、人治によって法治を徹底的に否定することである。

### 3、知識分子は資産階級を代表する力であり、建国後の主たる革命対象と認定したこと。

ソ連共産党は、十月革命勝利後、知識分子を資産階級イデオロギーの代表とみなし、文字による検査を大いに実行させた。レーニンは、旧時代の知識分子が十月革命について異見をもっていたために、300人あまりの著名なロシア人学者を船2艘におしこんでソ連から追放した（いわゆる愚者の船事件）。スターリン時代の大粛清は、独自の見解を持つ知識分子を継続的かつ大量に迫害したもので、恐怖によって言論出版の自由を禁じたのである。1922年から、ソビエト共産党は200万人あまりの知識分子を追放した。ゴリキーは驚き、「時宜に合わない思想」という文章を書いて、十月革命を批判した。「これは文化に対する殲滅であり、それがもたらしたものは群衆の獸的本能と人間性をとことん台無しにした経験にほかならない」と。レーニンは「革命についていえば、成功を得る保証とは統治階級と文化階層を消滅させることだ」と述べた。彼と政治局は集団的な決定として、こうした人員を消滅させるために、チェーカー・ガーゲーベ（KGB）・グラーク（ラーゲリ）などの専制的機関を創設した。

中共は共産主義を信じる知識分子たちが都市で発足させたものだが、前述のように、建党後は理論的にも実践的にも、長期にわたってソビエト共産党お

よびそのシンパによって実質的なコントロールと影響を受けていた。ソ連とおなじく「唯成分論」（訳注：家庭の出身や本人の由緒を唯一の基準にして人を評価・任用する）を大いに進め、知識分子の幹部を排斥し、労働者の抜擢を優先、知識分子はあてにならないと考えた。こうした指導的思想のもとで、向忠発や顧順章といった、もともと品格の悪い人物が、出身がよいということで、知識分子のかわりに中央幹部になりかわった。こうした人間が、事実上、革命を変質させ、同志を売り、党組織に重大な破壊をもたらしたのだ。

1930年代後半から1943年の「コミンテルン」解消にいたり、王明とコミンテルンは歴史の舞台から退場しはじめ、中共の主力は農村に転じて根拠地を築いた。かくて毛沢東を首領とする武装農民を主体とする政党が形成された。中国革命は農民を主力とし、武装闘争を中心として、農村を主たる基地とし、農村から都市を包囲する路線の農民革命へとむかった。党内では、知識分子の地位は大いにさげられ、知識分子のことをとりあげるや、たちまち「王明教条主義者」として鼻で笑われたのである。

ここで注意すべきは、いわゆる「プロレタリア」の階級構成の問題である。中国社会には生産量の多い産業労働者が極めて少ないため、「プロレタリア」は困窮者の代名詞となり、困窮すればするほど革命性があることになってしまった。農民における小作農、貧下中農、ルンペン・プロレタリアートなどを、毛沢東が最初に『中国社会各階級の分析』で述べたように、労働者階級に代わってプロレタリアートの代表者とし、革命の主たる原動力とした。毛沢東は1939年11月7日の手紙のなかでこう述べている。「いわゆる民主主義の内容は、中国においては、基本的に農民闘争である……農村社会は古い中国ではあるが、目前の新中国には農村しか残されていない」（『毛沢東文芸論集』）。

このような「プロレタリア」から成る中国の特色とは、農民意識やルンペン・プロレタリアの思想が党内で非常に強化され、民主と科学の思想は存続できなかった点にある。しかし、およそ中国農民反乱（太平天国）に対するマルクスの評価を知っている者なら、次のことがわかるはずだ。このような中国

式の「プロレタリア」とマルクスの学説がいう工業プロレタリアとは、まったく異なる概念である。まさに、マルクスが考えた「停滞して閉じられた社会において生まれた悪魔」の力を、中国革命は「プロレタリア」の頼るべき力としたわけである。

一方、知識分子は「非プロレタリアート」の出身であり、しかも「旧社会の資産階級教育」をうけたので原罪があり、差別される。毛沢東の知識分子に対する見方は、つねに排斥傾向にある。『中国社会各階級の分析』の初期の版では、大学生と知識分子は反動資産階級、革命対象に列せられていた。延安整風期間でも、知識分子に対する理論は、『延安文芸座談会講話』に集中的にみられるように、農民と比べて「きれいではない」「思想感情が改造されなければ農民と相容れない」とされた。1949年には『人民民主独裁について』で「知識分子は長いあいだ旧社会で生活していたから、悪しき習慣、悪しき思想を持ち、新社会とは相容れない」と述べている。知識分子は「ひとく個人主義」であり、「彼らの知識は不完全」であり、「知識が多ければ多いほど反動」などとされる。左翼文化人あるいは長く知識分子として仕事に従事した党内幹部も例外ではない。当時、延安整風では王実味を処分し、建国後の運動は『武訓伝』や俞平伯の『紅樓夢』研究の批判、反胡風、「丁玲、陳企霞反党グループ」打倒など、いずれも知識分子を対象とした。その理論的根拠とは、知識分子はプロレタリアートではなく、資産階級の代弁者だという決めつけであった。

農民を主体とする「プロレタリアート」軍隊が権力を掌握して以後、知識分子との矛盾はさらに突出した。「文檔」によれば、1949年南京解放後、南下した幹部は都市管理がまったくわからず、しかも都市の幹部が知識を備え、都市工作をよく知っていることを忌み嫌った。そして「自分たちの軍隊が天下をおさえたのに、都市の地下党幹部に権力を握られる」といって、腹を立てた。すぐに「整党」によって、ありもしない政治経歴や出身・社会関係などの問題を取りあげ、多くの知識分子幹部に打撃を与え、党から除名した。「文檔」には、もと南京などで都市地下工作をした知識分子の黨員幹部が、1949年以後、地下党を処理する十六字の方針「降級安排（降



格人事)、控制使用(使用制限)、就地消化(現地消化)、逐步淘汰(次第に淘汰)」のとおりに「逐步淘汰」されたか記している。「文檔」によれば、類似した状況は1950年代初めの浙江でもひろく存在していた。業務になれておらず、文化程度の低い軍隊幹部が、党政および各業務単位の主たる責任者となった。その後の反右運動における「素人は玄人を指導できない」の問題は、当時全国でひろく存在したこうした現象を反映していた。農民出身の軍隊幹部は「出身成分」「路線闘争」を武器として、現地幹部や知識分子エリートをなるべく排斥した。浙江、広東、広西の「南下した幹部」と地方幹部のあいだには多大な矛盾が発生し、セクトが形成され、それが反右運動で「地方主義」という罪行の伏線となった。

反右闘争において、社会主義革命の主たる敵は資産階級であり、知識分子は資産階級の主たる代表だと毛沢東は決めつけた。ソ連共産党のときと同じく、知識分子は中共に対して異議を提出することができ、独立した見解を持ち、言うことをきかないからであり、高度に集権的な統治の必要性と彼らとのあいだには、根本的な矛盾が形成され、強権的なイデオロギーにとって主たる脅威となるからである。中央集権と輿論の統一という統治上の要求によって、権力掌握後はソ連共産党と同様に、独立した思想の持ち主たちを差別対象として扱わなければならなかった。つまり、ソ連式の独裁と専制が存在するところでは、知識人に対する言論弾圧・奴隷化・敵視が止むことはないのだ。

以上をまとめると、反右運動の内因は少なくとも次の3点となる。①反民主的な全体主義制度。②反法治の階級闘争という手段。③反知識分子の非近代的な農民意識と階級路線。この3点はいずれもソ連共産党からの政治的遺伝子の遺伝であり、また千年来の皇帝権力による社会文化的伝統とその発展である。つまり反右運動とは、国産と西洋産がかけあわされた産物である。のちに中ソ関係が悪化したあとも、こうした政治的遺伝子は除かれることがなかったばかりか、いっそうかたくなに守られて「正統」となり、こうした遺伝子を糾そうとした言論や観点はすべて、大逆非道の「修正主義」「右傾」として批判された。かくして中国社会の発展は、近代化か

ら遠ざかるばかりとなった。

こうした視点から反右運動を考えれば、上述の「政治的遺伝子」が反右運動発生の内因であることがわかる。ただし反右運動という名称ははたしてこの名称を使うべきかいなか、あるいは1957年に発生したとしていいかどうか、この点はしばらく措くことにしたい。いずれにしても、政治事件というものは、なんらかの面目をもって世に出るのは、理の当然ではある。

### 三、反右運動の伝承と発生

歴史はいつもすぐに過ぎ去るものではない。1957年の反右運動も突然発生しただけでなく、最後の1回でもなかった。建国後、何度となくおこった政治運動の続きであり、その重要な事件の一つであるとともに、いろいろなかたちで歴史に再現した。反右傾、四清、文革、そして89年六四事件は、いずれも反右運動の延長ないし発展にほかならない。反右運動の最も直接的な結果とは、大躍進と餓死者3000万人余をだした大飢饉、そして十年文革であった。

#### 1、50年代における知識分子を対象とする複数回の政治運動は反右運動の予兆である。

建国初期、1950年において、旧社会の知識分子問題について毛沢東は、第七期二中全会で「全面攻撃」しないよう提案した。当時は政権強化のために、最優先の運動は土地改革と反革命鎮圧であり、知識分子についての政策は、団結と教育にあった。すぐに、抗美援朝運動がおこるにつれ、1951年5月から52年にかけて、「知識分子の思想改造と組織整理工作」が進められ、同時に、大学・中学・小学の教職員に「忠誠に誠実に」歴史に向かう運動などがおこなわれ、反革命が整理された。また、「文化教育戦線における知識分子の思想改造」運動があり、知識分子がみずからの階級世界観から脱することが求められた。その重点は、欧米思想の影響を受けた旧社会の知識分子の批判にあった。いわゆる「洗澡(洗い落とす)」や「自己批判」によって、彼らの検討書が新聞に公開され、知識分子の「原罪意識」をえぐり、知識分子に中共の建国に対する正当性意識をたたきこんだ。同じ時期に中央は、「内層問題の整



理」を展開するよう指示した。1951から52年にも、民主党派・財経・文教・民衆団体などの機関の整理を求めた。この1年には、「武訓伝批判」、宗教の「三自革新と教会の民主改革」運動、「文学芸術界の整風と学習」運動などがあった。

建国初のこうしたひっきりなしの運動は、すべて知識分子、文化芸術界を狙いとしており、じつはすでに「反知性」の統治理念がはっきりと反映されていた。さらには、反右運動以前に「右派分子」という名称は党内で使用されていた。1953年に馮友蘭と党外民主人士に対する批判において、この名称はすでに使用されている。当時、北京大学では約三分の一以上の老教授は「中右」に内定していた。建国初にはやくも左・中・右という配列があった。

1954年から55年にかけて、『紅樓夢』批判を通して、胡適の「唯心主義」への批判がおこった。1954年には「胡風反革命グループ」事件があり、毛沢東はみずから批判材料にコメントを書いた。1955年、胡風問題の性質が隠れた反革命グループにレベルアップし、これに借りて「潜行反革命分子肅清運動」がおこなわれた。これはたちまち文化界の多くの人々に波及し、2000人あまりが胡風分子と決めつけられた。党外人士のほか、彭柏山・王元化など、党内で文化工作をしていたベテラン革命家までもそこに含まれた。

1955年、潘漢年・楊帆の事件が発生、地下党で都市工作をした幹部が大きな打撃を受けた。王堯山・夏衍・徐雪寒・丁伶らの知識分子・文化工作者である。「文檔」には、潘漢年事件にかかわった人員のリストおよび罪名が列記されている。こうした状況のもとで、1955年春当時、浙江省委書記だった江華は、全省幹部の会議でこう宣言している。「われわれ浙江にも第二の潘漢年がいる。長いあいだ地下工作をしたことのあるベテランだ、諸君、注意せよ！」。彼が指していたのは沙文漢である（これはデマであった。じつは、秘密保持の観点から、潘漢年の情報系は上海の地方党の秘密組織とまったく別系統だった）。1956年、党内で彼はさらに公開でデマをまいた。「沙文漢には、審査すべき政治的な経歴問題がある」と。これを理由に、沙文漢が省委書記処に入ることを阻止し、彼の省長代理の職責範囲

を勝手に削減し、敵に対するがごとく、電話盗聴などのスパイ行為をした。沙文漢に対する「淘汰」謀略が久しくおこなわれていたことがわかる。ただし、正式に右派とされるのは、3年近くのちの1957年末であった。

以上、建国初期における、党内外の知識分子・民主人士をねらった一連の政治運動を例示したが、彼らはもともと民主革命時期の左派勢力であった。彼らの言論を圧殺し、「革命対象」としていたのである。中共執政前後にこんな大きなコントラストが生じたのは、右派にされた人々に革命経験の資本と社会影響力があったからであり、新政権にとってもっとも運転がむずかしく、敵対勢力が現われやすい時期だったからである。以下に、こうした人々が執政によって脅威となるような例を挙げておこう。1953年に総路線が提示された。新民主主義から社会主義革命への過渡的なときにあたり、著名な民主人士である梁漱溟氏が私営工商業の改造問題について、全国政治協商会議で、1949年通過の「共同綱領」を遵守し、多種の経済が共同に存在すべきだと求めた。彼はこう指摘した。「農民を主たる基盤とする中共が、解放後の工作では重心を都市に移した。農村・農民の生活は苦しく、労働者と農民の生活格差は「九天九地」である。中共は農民を見捨てるべきではない」。彼はさらに、計画的な建国政策・政務の公開・工業発展や私営工商業改造の計画の公開を求めたうえで、毛沢東が批判を受け入れる「雅量」を持つよう求めた。

毛沢東はこの発言に激怒し、梁漱溟は「毒を放っている」「ペンで人を殺すやからだ」と反論した。1957年の反右で梁漱溟は逮捕されて「右派」のレッテルをはられた。文革中、右派分子である梁漱溟は第九回党大会（1969年）期間に「憲法制定の目的は個人の権力の濫用を制限するため」だから、修訂草案中に後継者〔訳注：林彪〕の名前を入れることに反対した。いわく「国家主席を立てることと、誰を当選させるかは別のことだ」。四人組打倒後、「二つのすべて」派の極左的雰囲気においても、彼はまっさきに「文革の否定には、人治こそが最大の教訓」だとして、「法による治国」を求めた。1957年に右派分子の章伯鈞はこう述べた。「政治協商会

議・人民代表大会・民主党派と人民団体は政治設計院をつくり、国是を共同討議すべきだ」。羅隆基はこう指摘した、「1949年以後の三反・五反・肅反などの運動は偏向が多かったから、無実の罪を取り除くべきだ」。儲安平も、「党の天下」はすべてのセクト主義の根源であり、「党が国家を指導する」とは、この国家が党の所有になるということではない、と述べた。彭文応は「一辺倒」に賛成せず、こう述べた、「ソ連に学ぶのは必ずしもよくない、アメリカに学ぶのは必ずしも悪くない……」。

当時のいわゆる「党内最大右派」の一人だった沙文漢の右派言論も、やはり「共同綱領」にもとづいて統治し、党外民主人士の職権を尊重し、党外右派を保護するものだった。彼は「党政分離」を提示し、各級の人民代表大会および各級の政府部門に相応の権力を与え、「党内民主」の実行を求め、省委の「一言堂（鶴の一声）」をしりぞけるよう主張した。陳修良の罪名は党の代表大会で「民主の発揚」を述べ、省委の指導者の一部を名指しで批判し、第八回党大会〔訳注：1956年〕での経済文化建設方針に関する政治報告を貫徹するよう主張し、階級闘争は基本的に終了したという論述に同意したことであった。

こうした党内外の典型的な右派言論は、じつは革命を擁護して参加した初心を表現したものであったが、これはすでに毛沢東の執政理念と対立するものであることが彼らにはわからず、中共が政権を執ってからの歴史的なコントラストがかくも速くかつ大きくやってきていたとは思ひもなかったのだ。毛沢東は当時のこうした民主人士を「盗賊船にのりあわせた」と風刺した。つまり、彼らが革命家から反革命家に変質したのも、掌を返した瞬間なのだ。

反右運動は1958年の大躍進で一段落を迎えたが、終わったわけではない。それ以後の数次の運動に続いた「不断革命」であった。「文檔」はそののち10年しておこった文革関連の資料を大量に収めており、文化大革命はもう一つのより大規模な反右運動であることを証明している。つまりその目標は、さらに中共を整理して資産階級知識分子・文化人を整理することにあった。反右運動以前に、康生や江青は党内幹部を名指しで批判し、柯慶施とむすんで「30年代文化人」を打倒しようと提案したが、陳丕頭の反

対に遭った。そのなかで沙文漢および前掲の右派分子たち、胡風・潘漢年らの人々は、30年代上海の文化工作に従事したがために、すべてその列に入れられた。江青らの談話ではこう言い切っている、「彼らは反徒ではなく、スパイであり、一人として善人はいない」（上海公安局『黄赤波罪行録』）。

歴史はこう教えている。このような運動はそれがいかなる名称であろうと、どんなスローガンを叫ぼうと、それが言論と思想の自由を弾圧しつづけ、個人崇拜をうちたてようとするものであれば、かならず伝承されて継続的に発生するのである。これこそ反右運動がわれわれに与えた重要な啓示である。

## 2、反右運動が発生したときの国内・国際情勢。

上述のごとく、50年代の数次におよぶ運動が反右運動の趨勢を予示していたとはいえ、1957年に発生したというのは、必ずやその偶然性あるいは導火線があったはずだ。

1956年には国内外で大事件が勃発していた。まず中国国内では大きな変化が生じていた。当時の中央は、まさに経済建設へと重心を移す準備をしていた。多くの部門から経済建設に関する報告を聴取し、農業・軽工業・重工業の発展について討論したあと、年初には毛沢東が「十大関係論」を起草して、「積極的要素のすべてをどう動員して」社会主義を建設するか提案した。4月にはさらに「百花齊放、百家争鳴」方針を打ち出し、中宣部の陸定一郎長がそれに関する特別報告をおこなった。これは、文芸・学術界を大きく鼓吹する作用があった。数次の政治運動と改造を経たあとの多くの人々にとって、これはやっと春が来たと感じられた。

1956年9月に中共第八回大会が開催、全国の形勢についての政府報告で、劉少奇が目前のわが国の主たる矛盾を提示し、「先進的な工業国を建設する要求と、後進的な農業国としての現実とのあいだの矛盾、経済文化を迅速に発展させるべき要求と、目前の経済文化が人民の需要を満足させることができない状況とのあいだの矛盾」だとした。この指摘は、中共が政権を執って以来、最も適切な指導要領的目標であり、全国各地の戦線で賛同を得た。

しかし、この意見に毛沢東は同意しなかった。こ

の報告は自分の同意を得ないうちに早々に発表されたものだ」と毛沢東は言っている。毛沢東によれば、階級闘争・路線闘争こそが国内の主たる矛盾であった。劉少奇の政治報告の墨がまだ乾かないうちに、毛沢東は早くも目前の主たる矛盾に関する論述がまんならなくなった。これが反右運動をこの時期に発動した毛沢東の重要な動因の一つである。

反右運動は国際的な形勢の変化とも直接的な関係がある。この一年にソ連共産党は第二十回大会を開催、フルシチョフの報告はスターリンへの個人崇拜を批判し、ソ連共産党の歴史における肅清・整風の冤罪事件を暴露した。これは、国際共産主義運動、とくに東欧に対して動揺をおこさせた。同年、ポーランドとハンガリーでソ連スターリン主義に反対する事件が発生した。これらの中共に対する影響は重大であった。このとき中国では全国で学生のス・労働者のス・農民の高級合作社脱退の要求が数多く発生した。「文檔」にも当時の浙江省の状況、とくに農業合作社脱退の問題がみられる。土地改革ののち、まだ4・5年もたわずして、農民が手にしたばかりの土地を合作化してすべてとりあげたわけであるから、生産への農民の積極性に対して大きな影響を与え、騒動が多く発生した。国内では、5回の「プチ・ハンガリー事件」が発生した。

ソ連共産党と東欧の事件が中共の統治に威力とならないように、毛沢東はソ連共産党と東欧の経験を総括すべきだと考えた。1956年11月の中共第八屆二中全会の席上、毛沢東はポーランド・ハンガリーの事件に言及しつつ、次のように述べた。「ソ連共産党第二十回代表大会について、一点だけ話しておきたい。私の見るところ、二振りの刀がある。一つはレーニン、一つはスターリンだ。いまやスターリンという刀をロシア人は捨ててしまった」。「東欧のいくつかの国の基本的問題は、階級闘争をうまくできなかったことだ。だから多くの反革命をそのままにしていた。階級闘争のなかでプロレタリアを訓練し、敵と味方をはっきり分かち、是非をはっきり分かち、唯物論と唯心論をはっきり分かちということをしていなかった。いまや、自業自得だ」。

これらは、ソ連共産党が「個人崇拜」「階級闘争」を否定した問題を、毛沢東が非常に憂慮していたこ

とを意味する。なぜなら、この二つこそ毛沢東の執政における伝家の宝刀だからである。個人崇拜の問題では、毛沢東はそののち成都会議でこう述べている。「個人崇拜には正しいものと正しくないものがある」、さらにのちには「個人崇拜とはつまり私を崇拜することだ」ともいう。レーニンが在世中、ある人物が彼の独裁を批判したとき、レーニンはこう言った、「あなたの独裁よりは私の方がましだ」。1963年に毛沢東はさらに明確に言っている、「個人崇拜への反対は、じつは指導者と大衆を対立させることであり、党の民主集中制の統一的指導を破壊することであり、党の戦闘力をしばませ、党の隊列を乱すことだ」。

ここに、中共は執政以来ずっと、「一人の指導者、一つの主義、一つの政党」〔訳注：国民党のスローガン〕という原則を貫徹し、毛沢東は「個人崇拜」「独裁」というスローガンすら厭わなかった事情をみることができる。中共執政後の歴史でなにゆえ180度の鏡像的なコントラストが生じたのか、その原因もおのずと理解できるであろう。

### 3、新たな形勢下の解決方法：蛇を穴から引き出し、まとめて殲滅する

当時の国内外の形勢は、建国後はじめての経験だったため、ソ連の第二十回大会にどう対応するか、理論的に説明すべきことは以前とはまったく異なっていた（とくにスターリンとソ連共産党についての問題）。また、国内で数年間におこなった運動がひきおこしつつあった問題および争議をどう解釈するか、そうなると、中共の執政の合理性をどう説明するか、こうした問題は理論的にも実践的にも解決すべき切迫した問題となった。こんな新しい情勢に臨んで、1957年初に毛沢東は「人民内部の矛盾を正確に処理する問題について」を執筆、指導者による民主の必要性を特に強調し、あわせて肅清・合作化・工業商業の改造・争議などの問題を解釈した。つまり、ソ連と東欧の経験を総括し、それに中国の形勢を結びつけたのであり、なんとしても中国に類似の運動がおこらないようにしよう」と毛沢東が考え出した理論的思考である。

その対策を簡単に言えば、国際問題では、「教条



主義反対」だけでなく「修正主義反対」を強調した。国内の「騒動」については、主に各級の指導者の考え方および仕事ぶりに問題があると考え、整風によって意見を聞き、「春雨のようにして」これら人民内部の矛盾を解決するよう提示している。

これにともない、1957年4月27日、中央は整風に関する指示を出し、メーデーのあと、それが新聞に出た。党内の「反主観主義・官僚主義・セクト主義」の「三風」を提示し、あわせて民主党派の座談会を開催して、意見を出して党の整風を手伝うよう民主党派の人々に伝えた。短期間に全国各地で37万条をこえる意見が提出された。前掲の民主人士の批判は、「三風」の根源はセクト主義、つまり一党独裁(党の天下)にあるとし、多党民主・参政権・議会制(政治設計院、政権の輪番制)を要求、「素人が玄人を指導する」ことを批判した。こうした意見は、毛沢東からすれば、共産党政権を奪おうとするものであり、毒を吐く「毒草」であった。

おそらく予想外だったのだろう、毛沢東はこう述べている。「共産党の執政がまだ8年にもならないのに、30万あまりの意見が錯誤や罪状をとりあげている。つまりは共産党は政権の座を降りるべきなのか？おれをふたたび井岡山に登らせようというのか？」。戦争の思考方法になれた彼からすれば、たちまち敵対する戦鬪的位相に進攻することになる。半月もしないうちに、5月15日に毛沢東は内部文書として「事情はまさに変化している」を書いて、こう提示している。「党内外の右派の進攻はまだ頂点に至っていない」「敵を深く導きこみ、まとめて殲滅せよ」。5月中旬から6月初にかけて、中央は指示を連発し、反撃の策略を制定、右派に自分の意見を露出させた。6月6日、「力を集めて右派分子の進攻に反撃の準備をする指示」を内部発表、この「戦鬪は煙も光線もないが、党の心臓で展開される」と書いている。同じ日、民主同盟の人々は、「党の整風を手伝う」という求めの通り、6人の著名な教授を用意して座談会を開き、党の指導と高等教育の管理について意見を出していた。彼らというのは、錢偉長、曾昭掄、費孝通、陶大鏞、吳景超、黃業眠である。

1957年6月8日に『人民日報』社説「これはなぜか」発表、全国の反右運動が正式に繰り広げられた。整

風の発表からここまで、30日の時間で整風から反右への変転が完了した。1年後の1958年5月3日、中央政治局拡大会議の宣言によれば、全国で120万人が右派および中右(内控右派、訳注:右派として公布されていない右派)とされ、22000の右派グループが引き出され、党員では22万人が右派とされた。当時、全国で小学以上の知識分子は500万人あまりであったから、右派と中右で5分の1以上である。これは、平和な時代に、毛沢東が手に寸鉄も帯びない敵との「即決戦」をやった大勝利の結果である。

これはいったい「陰謀」なのか「陽謀」なのか、多くの意見がある。だが、こうした問いはすでに無意味であろう。1ヶ月の時間で「整風」から「反右」へ、「春雨」から「疾風暴雨」に急変したこと、これは毛沢東が一貫して用いてきた必勝法の「権謀」である。「権謀」である以上、文字通り、目的のためには手段を選ばないのであり、陰謀でもいいし陽謀でもいい、そこには何らの違いもない。今後の研究が必要なのは、この運動の本質と、それがもたらした深遠な影響であろう。

70年代末、右派が「改正」されたとき、中共の公的機関が発表した改正者の数は552877人で、全国で96人が「改正」されなかった。つまり99.99%が間違いだったというのだ。なるほど「反右は必要であり、ただ拡大化しただけ」ということだ。歴史をさかのぼれば、狭い時空から脱出し、より理性的客観的に事件の是非を判断できるだろう。反右運動はほんとうに「必要」だったのか、いったいどれによって「必要」だったのか？

反右運動の影響は重大かつ深遠である。知識分子に対する中共の大規模な打撃は、ここから始まった。これにより、知識分子を主体とする中産階級はずっと不振のままとなり、中国社会の構造は奇形化し、近代化の歩みを遅らせ、世界の先進的な科学と文化から中国を引き離した。発展した国家は、強い中産階級(人口の60%)があるため、社会構造はオリブ型、つまり中間が大きく、両極が小さい。しかるに、中国社会の構造はタワー型である。つまり、トップの人口で2%にも及ばない貴顕階級が、70%以上の社会資本を占有しており、中間には脆弱な中産階級(人口の20%足らず)、その下には広大な貧困



層があり、両極の分化がはなはだしい。これは、中国が民主憲政の道に進めない根本的原因でもある。反右運動の重大な結果の別の一面は、党文化がしだいに中国の伝統的な文明や道徳にとってかわり、党性〔訳注：党を中心に考える性質〕によって人性〔訳注：人間を中心に考える性質〕が抑圧されていることである。党文化は階級闘争を柱とし、やくざ・ごろつき文化、なぐる・こわす・うぼう文化、おおぼらふき文化、にせもの文化、うそつき文化、恐怖をあおる文化、盗作文化などなどを含んでいる。中華の伝統的な文明・道徳をつねに打撃しつづけ、それは文化大革命にいたって極限となり、人倫は転覆し、道義は沈淪した。

歴史は遡及にあたいする。十干十二支が一巡りした時点で反右運動をふりかえると、むしろ以前よりはっきりと、連続性をもって、自然にかつ深く感じとることができる。これは、時間の推移につれて、新たな歴史事件がたえまなく謎を紐解いてくれるからである。つまり反右運動は、完全に過去のものになったことはなく、歴史はいろいろなかたちで反復して再現され、よりあきらかに反右運動の影響と結果を現前させてくれる。これにより、過去の事件をより全面的に、より深く理解できるのである。あるときにははっきり見えなかった問題でも、歴史の流れに置いて観察してみると、しだいにその原形と全貌が明らかになるのである。幸いにも歴史の真相が取り戻されたなら、それはどんな人の意志でも、けって動かすことはできないし、閉じ込めることもできない。その人が時間を停止できるというなら話は別だが！

## 第二部分 反右運動の十大研究課題

反右運動に対する中共当局の否定と資料封鎖によって、反右運動の研究は、60年来、知られざる問題ないし見逃されてきた問題がまだ多く残されており、これを本稿では「研究課題」と称する。

1、反右運動の性質とは？「五七反右運動」なのか、「五七反右派運動」なのか、「五七右派運動」なのか、「五七民主運動」なのか？その起点は毛沢東が『人

民日報』社説「これはなぜか？」を書いた6月8日なのか、それとも北京大学「五一九」運動の5月19日なのか？

2、反右運動が起こった原因は、ハンガリー事件なのか、フルシチョフ秘密報告なのか、大鳴大放なのか、それともより深い社会政治的、文化的な淵源があるのか？偶然だったのか、必然だったのか？

3、反右は、中国数千年の道徳文化に対する党文化、「党性」の挑戦あるいは衝突だったのか、陰謀ないし陽謀なのか、それとも権謀だったのか？「党文化」とはいかなるものか？（階級闘争・六親を認めない・労働改造と労働教育・暴力を使う粗暴さ・自白の強制・密告・誇張したホラ・デマ・にせもの・ウソ・健忘・嫉妬といった文化）

4、何人の右派を打倒したのか？官製の552877人という説から800万人あまりの説があるが、いったい何人が正しいのか？

5、反右運動の最終的な攻撃目標は何だったのか？知識分子の粛清にとどまるのか、それとも党の粛清にまでいたるのか？

6、なぜ地方主義や地方民族主義分子までも右派分子とされたのか？

7、第五縦隊（中共特別党員）の反右における働きは？いかにして民主党派を転覆させたのか？

8、人民に残虐行為をする者が司法官になっているという反転は？

9、右派の心理的要素の作用は？

10、反右の名誉回復と正義の転換の関係は？

## 第三部分 プロレタリア文化大革命

1958年、反右の補足的な運動以後、毛沢東は党内外を声無き原野とした。異見を出させないという目的を達成し、手放しでユートピア式の総路線・大躍進・人民公社の三面紅旗をやることができた。これは、3000万人が餓死する大災難をかもした。

しかし、反右は毛沢東が党内の異なる政治見識の者や知識分子を整理する第一歩にすぎなかった。反右で粛清された最高位は中共中央候補委員・中共河南省委書記の潘復生および数十名の省の部局の高級幹部、それに軍隊では3名の中将（劉宗寬、郭汝槐、

童陸生)と2名の少将(陳沂、範明)であった。劉伯承元帥・粟裕大将・蕭克上将らは批判闘争に遭ったが、右派のレッテルは貼られなかった。たった一年後の廬山会議で彭徳懐元帥と黄克誠大将が引き出された。文革になると、爆破作業をしかけたごとく、党・政・軍の各級の指導者はほとんどすべてふっとばされた。

反右から文革まで、わずかに8年のあいだに、「右傾機会主義運動批判」と「社会主義教育(四清)運動」があった。廬山会議で彭徳懐と黄克誠ら右傾機会主義反党グループが引き出され、全党では360万の右傾機会主義分子が引き出された。当時の中共の党・政・軍の幹部は全部で1000万あまりだったから、右傾機会主義分子はほぼ3分の1を占めたことになるが、1年後には次々とレッテルをはずされた。このような現実離れした空騒ぎの階級闘争・政治運動のやり方は、中共にとって伝家の宝刀であった。四清運動は毛沢東と劉少奇の矛盾を暴露した。毛沢東は運動の重点を党内の資本主義の道を歩む実権派と都市で反右を継続することに置いていたが、劉少奇は四清運動は四清四不清の問題〔訳注：政治・思想・組織・経済の整理〕にあった。反右から文革までの8年間に、この2回の政治運動を経て、中共中央の最高層の二大司令部は、もはや氷炭相容れぬことが明らかになった。一方は毛沢東のいわゆるプロレタリア司令部、もう一つは劉少奇・鄧小平を首領とする資産階級司令部である。中国社会における階級闘争は、中共党内の矛盾の延長であり、外交そして内政の延長である。中共党内の路線闘争は、必ず社会や国際外交に反映される。

#### 第四部分 六四学生民主運動

六四以前の56回の政治運動は、すべて中共の趣旨にそった「官製造反」だとするなら、六四学生民主運動は完全に「官命にさからう造反」であった。

中共は毛沢東を第一代指導者、鄧小平を第二代指導者、江沢民を第三代指導者という。毛沢東と鄧小平のあいだには華国鋒がいた。鄧小平と江沢民のあいだには胡耀邦と趙紫陽がいた。これら3人はあたかも、中共の歴史上で最も開明的な指導者だったゆ

えに、正統派の元老たちの好みにあわず、それゆえ指導者の階層から排除されて別冊あつかいとなったかのようだ。

1989年4月15日、人民の推戴を受けていた胡耀邦が亡くなり、首都の学生たちは自発的に街に出て、天安門に向かい、胡耀邦を哀悼した。趙紫陽は5月4日にアジア開発銀行の会議の席で国内情勢に言及し、鄧小平の態度と完全に悖る見方を提示した。彼はこう述べた、「現在、北京とその他の諸都市では、一部の学生のデモがいまだに継続している。しかし、私は深く信じているが、この事態は次第に終息し、中国には動乱はおこらない。私はこの点について十分に自信がある。デモ隊の大多数の学生は、絶対に、われわれの根本的制度に反対するものではなく、われわれが仕事における弊害を取り除くべきだと求めているのである。現在、最も必要なのは、冷静さと理智、自己制御、秩序であり、民主と法制のルールの上で問題を解決することだ」。

趙紫陽の講話は学生運動の高潮を激発した。翌日の北京では百万の学生が街に繰り出し、全国300あまりの都市でそれに呼応した。かくて鄧小平・陳雲ら元老と保守派は恐慌を来し、特権が失われ、世間が騒ぐように思われて、ついには殺気がおこって、軍隊を動員して鎮圧した。中共の一元独裁政権を守るために、鄧小平は鶏を殺して猿の見せしめにした。「20万人殺せば、20年安定する」。アメリカ駐香港総領事館およびホワイトハウス情報室によれば、六四期間に10454人が殺害、28796人が傷害、外電には被害者13362人もいう。六四のあと、中共はまた全国範囲で、1年間を期限とする党団員の登記しなおし選別運動をおこない、一人一人態度表明させて、それぞれ閹門を通らせた。

毛沢東は、およそ学生運動を鎮圧する者によい退場はない、と言ったことがある。中国では、六四大虐殺で政治家が入れ替わると、汚職が世間に満ち、学生運動は失敗におわったごとくである。しかし「垣根の内では花開き、垣根の外に香る」ということわざのように、北京の学生の鮮血は無駄に流れたわけではない。中国の六四学生民主運動は、ソ連の崩壊、共産主義陣営の分裂に影響した。中国の学生民主運動の功績は埋没させるべきではない。

## 第五部分 結論——共産主義の宿命

(一) 中共の独裁政権は、知識分子を主体とする中産階級を敵視した。反右—文革—六四の発生には必然性があり、三者は継承と因果関係にある。その目的はいずれも党内外の異見を肅清し、専制独裁政権を強固にすることにある。

(二) 六四民主運動は命令にそむく造反の自発的大衆運動であったが、それ以外の運動は、反右にせよ文革にせよ、命令を奉じた官製造反（「大衆を運動させる」）であり、共産党は大衆の発動・大衆を運動させるのを得意とする。毛沢東は兵法書を熟読し、運動のたびに、上から下まで、外から内まで、打撃目標と打撃指標をうちだしていた。まず党外から、そして党内へ、まず基層から、そして高層へとむかい、最後には運動の最終目標に到達する。

(三) 六四民主運動以外の諸運動では、毛沢東が上述の戦術方針を確立したあと、みずから各地を巡視し、獲物を探し出して、戦機をとらえておこない、異見を消し去り、子分を物色したものだ。毎回の運動できまって1-5%、さらには8-10%が指標とされた。これは中共の発明になるもので、指標は過ぎたるがよく、及ばないことはない。こうした「右になるよ

りはむしろ左になれ」というやり方は、拡大化と冤罪を生む根源である。

(四) 古今東西、いかなる独裁政権もすべて恐怖とデマの基礎の上に立てられた。中国人民の恨み骨髓を買っている中共の人事檔案制度は、中共が政権を維持し、階級闘争をおこなうための礎石であり、今日の安定維持に必要な手段でもある。毎回の運動の打撃目標は、すべて個人の檔案からわずかな痕跡を求め、それをもとに打撃目標をさがしだすのである。

(五) 人類の歴史の流れにおいて、共産主義の政体はわずかな一瞥の時間にすぎない。世界史の発展法則は必ずや独裁から民主に向かう。ソ連およびその主導した共産主義陣営は興亡を経て、現存するのはわずかに中国と北朝鮮など少数にすぎない。中国の民主革命の先駆者である孫中山先生はかつてこう述べた。「世界の民主の潮流は浩浩蕩蕩たり、我に順う者はさかえ、我に逆う者は亡ぶ」。中共はいたるところで以前のソ連を手本としている。試みに今日の中国と昨日のソ連を比較してみれば、中国の明日に一つのはっきりした展望をもたせることができるだろう（表1・表2を参照のこと）。

（しんえん、著述家・香港在住）

表1 以前のソ連

順番	性質				
一	血による政権	レーニン—スターリン	1917—1953	36	
二	修正主義中興	フルシチョフ	1953—1964	11	
三	保守勢力の反攻	ブレジネフ—アンドロポフ—チェルネンコ	1964—1984	7	
四	平和的転換	ゴルバチョフ	1984—1991	74	寿命 74
全					

表2 中国

順番	性質				
一	血による政権	毛沢東—華国鋒	1949—1978	29	
二	修正主義中興	鄧小平—胡耀邦—趙紫陽	1978—1989	11	鄧が実際の頭
三	保守勢力の反攻	江沢民—胡錦濤	1989—2012	23	
四	期待？	習近平	2012—(2022)	(10)	予断許さず
全			1949—(2022)	(73)	寿命 73

### 今後の研究会予定

6月例会 6月29日(木) 午後7時～、専修大学神田校舎1号館4階41教室

江雪『『星火』のメンバー向承鑑について』（仮題）

8月例会 8月31日(木) 午後7時～、専修大学神田校舎1号館2階204教室

鳥本まさき「文革中の一打三反運動について——あるドキュメンタリーから」

史料復刻 『星火』 第一号 (1960年1月印刷) 掲載

## 農民と農奴と奴隷 目の前にある農村の分析透視の一つ

張春元 (訳・土屋昌明)

現在の統治者のいわゆる「社会主義革命」の深化と発展につれて、農業問題は—その実質は農民問題だが、よじ登ることのできない、克服不能な巍々たる大山のごとく、統治者の面前に置かれている。現在の政策・法令・統治手段・搾取方式などからすると、現代の統治者も、かつての歴代の統治者と同様、この大山の面前で全身血みどろとなる蹉跎をふんでいる。

中国の根本問題はまさしく農民問題である。いかなる統治グループであろうと、いかなる政党であろうと、国家政治・生活における農民大衆の役割を抹殺し、彼らの経済的利益をないがしろにし、彼らの物質的享受を剥奪し、彼らの頭上に乗って偉ぶり喜び、彼らを牛馬のごとく扱う、このような考え方ややり方は、すべて愚昧であり、行き止まりの道を歩むことである。このことは歴史がすでに充分明らかに証明済みだ。現代の統治者が過去においておこなった活動からしてみても、戦略戦術、武装闘争、軍隊人員、食糧補給路などなど、その実質は農民戦争だった。不幸なことに、現代の統治者も、ほかの統治者と同様に、いったん政治権力の宝座に登るや、方向転換し、政治経済の法則を無視した超政治・超経済的な残酷な搾取と統治手段によって、かつて自分を養ってくれた支持者に応接した。ただし、今日の統治者は、歴代のいかなる統治グループとも異なるところがある。それは、彼らが歴史発展の客観的進展に反して、農村の生産力の破壊を本質とするような、独断専行と民意の抹殺をおこない、五億の農民を赤貧化させる政策と法令を進め、それによって農村ではすでに深刻かつ広範な大変化が引き起こされている点だ。このような変化は、中国の今後の歴史に新しい紀元を開き、斬新な時代を創造するであろう。

いま農村の大きな変化の一つは、農民の貧困と破産である。農村には新興の階層が出現している—農村プロレタリアだ。この階層の出現は、現今の統治

者が実行している徹底的に反動的な農業政策とその結果によっている。まず、農業集団化のかけ声のもと、形を変えて、残酷にも農民の土地・家畜・農具など生産材を間接的に制限し、穀物や油や綿花など生産所得に対し、あらゆる手段で略奪を加える。特に人民公社化以後、農民の農村プロレタリア化が大きく加速された。「共産主義への橋」といわれるカーテンのうしろで、広範な農民はやせ細り、食糧を待って口をあぐりあげ、国家の奴隷・農奴にさせられている。物質生活から人間的な自主性にいたるまで、すべてが現代の統治者から下賜されるものとなっている。いまの統治者は、歴史上見たこともない愚民政策をもてあそび、自分を農民の唯一かつ真正な利益代表者に扮装し、農村において、分断化・利益誘導・強迫・強制などの手段を使って、農民を軍事的組織の形を使って編成していき、統治を強化して農民の移転や就職や、外で生計を立てる最低の要求と道をふさいだ。自主性と自由の権利は全くない。目に見えない枷と鎖で農民を結わり、奴隷の烙印を押している。このほかに、現代の統治者がいうような公民の権利のすべて、選挙・集会と結社の自由・デモ行進の権利・言論の自由などなどは、農民にとっては完全に詐欺となっている。考えてもみてほしい、一年中、飢餓ライン上にあえぎながら、仕事に出なければ食べる物も無いような階層が、最低限の人間的生活の権利すらきれいさっぱり剥奪されてしまったら、政治的に真正な民権を享受することなどできるものかどうか？それでも民権があるというなら、統治者の意図のままになる道具である。

この深刻かつ広範な変化は、国家の民政と社会生活において重大な影響を及ぼしている。農民大衆が政治的に日々奴隷化していき、経済的に日々無産化していくことによって、農業生産性は壊滅し、食糧は減産し、各種の農業副産物や軽工業資材も不足し

[5 ページ下へつづく]



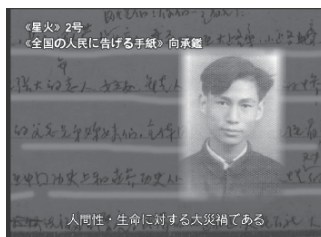
# 胡傑監督『星火』字幕（最終回）

土屋昌明 編訳

〔前号からのつづき〕

## 108

向承鑑の『全国の人民に告げる手紙』を朗読。



《告全国人民书》向承鑑。全国的父老兄弟们、姐妹们、全体同胞们，你们一定看到了：在高山、在平地、在大路旁、小路上、在车站、在家门口，那些衣衫褴褛，平展四肢、眼球突出，嘴巴张大的老年人、青年人、妇女和孩子们的惨相吧！我们已经看到了，我们已经经历了，我们什么都明白了，这是在中国历史上和世界历史上从未有过的，对于人性对生命的浩劫，当其他两亿人在半饥半饱的时候，那些全心全意为人民服务，做人民勤务员的畜生们，却在商店的后面可以买到任何点心，饼干、糖果、中华烟。他们可以恣意地开盛大的宴会，这样的宴会一次就要花上五千农民劳动一整年的成果，一句话，他们变了，他们脱胎换骨了，他们彻底变了，他们从 1957 年之后已经正式形成一个官僚统治集团。他们是人民大众的老爷。

『全国の人民に告げる手紙』向承鑑：全国のみなさん、みなさん見たことでしょう。山にも野にも、大通りにも路地にも駅にも戸口にも、ボロボロの衣服で四肢が突っ張り目玉が飛び出て、口をあけたままの老若男女の無残な姿を。すでにそれを目にし、経験してしまった我々は、全てがわかりました。これは中国の歴史で、世界の歴史でもかつてなかった、人間性・生命に対する大災禍である。2 億人が飢えて死にそうなときに、あれら「全身全霊で人民のために服務する」、人民の公務員たる畜生どもは、店の裏でいかなる品物も手に入れることができる。お菓子でも飴でもタバコでも何でもだ。いつでも盛大な宴会を開ける。宴会では 5000 人の農民が働いた物を消費する。要するに彼らは変質した。骨の髄まで変わり果てた。1957 年以降、すでにはっきりと官僚統治グループを形成していた。彼らは人民にとって旦那様となったのだ。

## 109

杜映華の次男が遺品のスターリン選集を示す。



胡傑：这是你爸爸的书吗？

杜映華二子：对，我给你取出来，就这几本，其他的

胡傑：これはお父さんの本ですか？

杜映華の次男：そうです。見せようと思って取り出

都拿走了说不上去了哪。这些是他唯一留下的。给我们留下的。(斯大林选集)这就是他当了一茬县委书记,唯一给我们留下来的。

## 110

向承鑑が杜映華について語る。



胡杰：作为杜映华他是一个县委书记，应该说在这个体制内，他知道做出这样的决定是很有风险的，他为什么也会跟着你们一起来做这些事情？

向承鑑：杜映华跟一般的共产党员确实不一样，我跟杜映华还有老张，张春元，我们三个都是农民的儿子。杜映华的情况我是很了解的，他家住在土甸子，是世世代代农民，农民。他原先参加革命也就是看见国民党腐败，对农民的疾苦不闻不问，所以奋起反抗。

## 111

王新民が杜映華について語る。

胡杰：武山有一个书记杜映华，你知道他的事吗？

王新民：我知道。他就是同情兰大这伙学生，结果把他判死刑枪毙了。

## 112

向承鑑が杜映華について語る。

向承鑑：杜映华也可以说没有忘记革命的初衷，这是最本质的问题。

## 113

杜映華の息子が父親について語る。



胡杰：后来你们到了土甸子，当时背了一个反革命家

しました。他は没収されてどこにいったかわかりません。これらが唯一父の残したものです。私たちに記念です。父が県委員書記のときの物です。唯一の形見なのです。

胡傑：杜映華は県委員書記として、体制内というべきで、このような考えは危険だと承知していたのに、なぜあなた方と行動を共にしたのでしょうか？

向承鑑：杜映華は普通の黨員と全く違う。私と杜映華と張春元とは、3人とも農家の出だ。杜映華のことはよく知っている。彼の家は土甸子で代々農家だった。農民だ。革命に参加したのも国民党の腐敗を見たからだ。農民の苦勞に見て見ぬふりはできない。だから奮起して反抗した。

胡傑：武山のある書記で杜映華という人、彼のことを知っていますか？

王新民：知っている。蘭州大の学生たちに同情した人だ。それで銃殺された。

向承鑑：杜映華は革命の初心を忘れなかったともいえる。これこそ最も本質的問題だ。

胡傑：それからあなた方は土甸子で、反革命の家族

属の帽子、

杜映華之子：那时候就全靠妈妈的魏家了。要不是魏家确实没有办法。再一个是我们年龄太小。要批斗你年龄太小够不上。如果是现在的年龄，我们都逃不出这个劫难。当时我母亲是一个农村家庭妇女。带的都是小娃娃。再一个是我父亲的社会影响太好了，陇西、漳县包括武山。

胡杰：所有别人都没怎么欺负你。

杜映華之子：不欺负，为了应付政策，有些政策他们也不敢违背。我父亲在群众中的影响可以说都是这。

という帽子をかぶせられたのですね。

杜映華の息子：母の魏家に身を寄せていた。それがダメなら、どうしようもなかった。あと、私たちは子供だったから、子供では批判闘争にもならない。今くらいの歳だったら終わっていた。母は農家で、連れていたのは子供ばかり。それに父の評判はよかったから、隴西や漳県・武山でも。

胡傑：いじめられなかったのですね。

杜映華の息子：いじめられなかった。政策通りにするために、ある種の政策には皆も逆らえないということはあったが、父の評判のおかげですよ。

## 114

甘肃省天水監獄が映り、杜映華の長男が面会したときのことを語る。



杜映華长子：1963年我是娃时去看过两次，一次见过，一次没让见。那时候困难的很。坐慢车到天水天都后夜快亮了，四五点钟。

胡杰：你爸爸当时是一个什么样的形象？

杜映華之子：脸黑的很，印象就是脸很黑的。挺苦的就是这样。

杜映華の長男：1963年、まだ子供のときに2回会いに行った。1回は面会し、1回は会わせてもらえなかった。あの頃は大変だった。鈍行で行って、天水に明け方4時から5時についた。

胡傑：お父さんはそのとき、どんな様子でした？

杜映華の息子：顔色が黒かった。顔色がとても黒いという印象がある。苦しんでいる様子だった。

## 115

杜映華の次男が語る。

杜映華之子：知道我父亲的人都说：共产党把它的最好的儿子都杀掉了。陇西最早的地下党员，白色恐怖下没有死在国民党的屠刀底下。最后死在极左路线的屠刀底下。

杜映華の子：父を知っている人は皆こう言う、「共産党は、自分の最良の息子たちまで殺してしまった」と。隴西の最も早くからの地下黨員は、国民党の白色テロでも死ななかったのに、最後は極左路線の餌食になってしまったのだ。

## 116

向承鑑が台地の前で火を焚いて、亡くなった同志に紙銭を贈る。



向承鑑：我是一个能够在真理面前低头的人，如果我错了，你把我怎么样我没有任何怨言。我觉得我们死掉的这些同学太可惜了，冯淑筠、邓得银、司美棠、胡学中，当然林昭就更不用说了，实在太可惜了。中国啊！一百多年了，民主科学、科学民主这四个字对中国来说真难啊！老杜、老张，两位兄长，四十年前你们俩在这里壮烈牺牲，为了亿万农民、为了我们民族的复兴，你们献出了自己宝贵的生命。我找不到你们的尸骨，但是，你们的精神一直活在我的心里，你们追求的民主正义的事情，一定会在中国大地上出现。你们安息吧！

## 117

林昭の詩が朗読される。

读林昭诗歌：

火 本应属于人类  
 怎能够把它永藏在天庭  
 哪怕没有我偷下火种  
 人们自己也找得到光明  
 远远地在沉睡的大地上  
 黑暗中出现了一线光明  
 火 普罗米修斯微笑地想着  
 这么多 好快 它就来自我那个小小的火星  
 燃烧吧 火啊 在囚禁中我祝福你  
 燃烧吧 火啊 燃烧在漫漫的长夜  
 冲破这黑暗如死的宁静  
 人啊 我喜欢呼唤你响亮高贵地名字  
 大地的子孙 作为一个兄弟  
 我深情地呼唤  
 人啊 我多么地爱你们

## 118

字幕による謝辞。

献给在中华民族最黑暗的年代，为大地盗取火种的所有英灵们。

## 119

字幕による『星火』事件関係者のリスト。

《星火》涉案人员（仅找到的部分）名单

张春元 原判“无期徒刑”1970年改判死刑 立即执行  
 杜映华 原判“5年徒刑”1970年改判死刑 立即执行

向承鑑：私は真理の前では従順な人間だ。自分が間違っていたら、どうしようかと恨み言は言わない。死んでしまった仲間は、本当に惜しまれる。馮淑筠・鄧得銀・司美棠・胡学中、もちろん林昭も。心から残念だ。中国よ、もう100年だ。民主・科学という4文字は、中国にとって何て難しいことか！杜さん・張さん……40年前ここで壮絶な犠牲となった。何億という農民のために、我々民族の復興のために、あなた方は貴重な命を捧げた。亡骸は探し出せないが、あなた方の精神は今も私の心に生きている。あなた方が追究した民主の正義も、中国の大地でずっと花開くはずだ。安らかに眠りたまえ。

林昭の詩：

火はもともと人類に属する  
 天上に隠しておけるはずはない  
 私が火種を盗まなかったとて  
 人は自らその光明を見いだせる  
 ずっと眠りこけていた大地の  
 その暗闇に一筋の光明が現われた  
 火よ プロメテウスは微笑んで思う  
 こんなに早く来たか 私の小さな火の星から  
 燃えろ 火よ 捕らわれの中で祝福せん  
 燃えろ 火よ だらだらと続く夜に  
 この死の如き暗闇の静けさを打ち破りつつ  
 人よ お前の尊く輝かしい名を叫ばん  
 大地の子よ 兄弟として  
 心の底から叫ばん  
 人よ 私はこんなにもお前を愛している

この映画を中華民族の最も暗黒の時代に、大地のために火種を盗った英霊たちに贈る。

『星火』事件関係者のリスト（判明した者のみ）

張春元 無期懲役 1970年再審で死刑—即時執行  
 杜映華 懲役5年 1970年再審で死刑—即時執行



林昭 原判 7 年 徒刑 1968 年改判死刑 立即執行  
 苗庆久 判刑 20 年  
 向承鑑 判刑 18 年  
 顧雁 判刑 17 年  
 何之明 判刑 15 年  
 譚蟬雪 判刑 15 年  
 胡晓愚 判刑 10 年  
 楊賢勇 判刑 10 年  
 顧炎武 判刑 7 年  
 孫和 判刑 7 年  
 陳德根 判刑 7 年  
 胡学中 判刑 5 年 ( 死于劳改队 )  
 王新民 判刑 4 年  
 羅守志 判刑 3 年  
 謝成 判刑 3 年  
 田昌文 判刑 3 年

林昭 懲役 7 年 1968 年再審で死刑—即時執行  
 苗慶久 懲役 20 年  
 向承鑑 懲役 18 年  
 顧雁 懲役 17 年  
 何之明 懲役 15 年  
 譚蟬雪 懲役 15 年  
 胡曉愚 懲役 10 年  
 楊賢勇 懲役 10 年  
 顧炎武 懲役 7 年 ( 訳者：梁炎武か )  
 孫和 懲役 7 年  
 陳德根 懲役 7 年  
 胡学中 懲役 5 年 ( 労働改造所で死亡 )  
 王新民 懲役 4 年  
 羅守志 懲役 3 年  
 謝成 懲役 3 年  
 田昌文 懲役 3 年

涉案农民 ( 仅找到的部分 ) 名单

王风岐 判刑 12 年 ( 死于看守所 )  
 刘武雄 判刑 12 年  
 雷焕章 判刑 7 年 ( 出狱后被斗死 )  
 雷振华 判刑 5 年  
 李德民 判刑 3 年  
 雷岩家 判刑 2 年  
 雷子祥 劳教 2 年

事件に関係した農民リスト ( 判明した者のみ )

王風岐 懲役 12 年 ( 留置所で死亡 )  
 劉武雄 懲役 12 年  
 雷煥章 懲役 7 年 ( 出獄後に批判大会で殺害 )  
 雷振華 懲役 5 年  
 李德民 懲役 3 年  
 雷岩家 懲役 2 年  
 雷子祥 労働改造 2 年

深深鸣谢默默为本片提供帮助的人

ご協力下さった全ての方々に深謝致します。

剧务 江芬芬

マネージメント 江芬芬

导演 拍照 编辑 胡杰 2013 年

監督・撮影・編集 胡傑 2013 年制作

編者付記：向承鑑『告白』は、アジア遊学『文化大革命を問い直す』40ページに全文の翻訳を載せている。

#### 附録：胡傑『星火』関連事項年表初稿 ( 一部は譚蟬雪『求索』にもとづく )

1956年5月26日 陸定一「百花齊放・百家爭鳴」。  
 1957年4月27日 中共中央「整風運動に関する指示」。  
 1957年5月19日 北京大学で学生の民主化運動、雑誌『広場』を  
 発刊。  
 1957年6月8日 毛沢東「力を結集して右派分子の気がいじみ  
 た攻撃に反撃を加えよう」。この後、反右派運動。蘭州大学で  
 は195名が右派とされたが、これは全校の人数の14%にあたり、  
 そのうち学生は143名だった。  
 1958年 蘭州大学の右派学生たちが天水と武山で労働改造にあ  
 たらせられる。  
 1958年5月5～23日 中共第8回党大会第2回会議。大躍進を肯定、

毛沢東が社会主義総路線を提示、10月までに人民公社化が全国  
 で実現 ( 三面紅旗 )。  
 1959年5月 張春元、顧雁、胡曉愚、孫和が天水の馬跑泉公社で  
 地下組織の結成を相談、農民暴動あるいは政変の惹起の可能性  
 を話し合う。顧雁は刊行物『星火』を提案。  
 1959年10月 向承鑑が華北に出張、各地で餓死者を目撃、兄と  
 議論。  
 1960年1月 『星火』第1号出来。  
 1960年2月 鄧得銀が四川の餓死者の悲惨な状況を星火メンバー

[ 5 ページ中段へつづく ]

## 革命史における崇高と残虐にどう向きあうのか

書評：王友琴・小林一美・安藤正士・安藤久美子『中国文化大革命「受難者伝」と「文革大年表」 崇高なる政治スローガンと残酷非道な実態』集広舎刊

前田年昭

「文革大年表」の利用を可能にした出版を喜びたい。中国プロレタリア文化大革命（以下、文革と略）を通じて歴史の主役に躍り出た中国民衆の姿がここから如実に読み取れるからだ。「日本人が作成編集した、国内唯一最大の文革年表」（小林一美）であり、40年かけてまとめられ、300頁を超える労作である。

本書の成立経緯は、共編共著者のひとりであり『文革受難者』著者である王友琴のまえがき「日本の読者へ」に記されている。それによると王の「文革受難者伝」を安藤正士・安藤久美子両名による「文革大年表」と併せて一書にしたいと訳者・小林が王に申し入れ、王は小林の「歴史学は人類の歩んできた道を長期的に眺め、人間の誤りの原因を探り、未来の道に誤りがないように反省を繰り返す学問」という言葉に「共感」して同意したという。

この小林の言葉には、歴史の理解とは、直面する現実の問題を歴史のなかに見いだすことと考える評者も心から同意する。

だが、それゆえにこそ、再びみたび文革を！と確信する評者は、文革を全面否定する共編共著者を真っ向から批判せざるを得ない。

批判の第1は、文革を論じる際にしばしば言い訳として語られる被害意識が本書にも姿を現していることである。いわく「文革の実態は、当時、私たちには全く分からなかった」（小林、14頁）、と。しかし、当時の報道は初期文革の暴力的様相をしっかりと報じていた事実を、私は「教育革命いまだならず」（土屋昌明編著『目撃！文化大革命』所収）で明らかにした。報道から何ひとつ読み取れなかったばかりか、半世紀もたたぬうちに“知らされていなかった”“分からなかった”と記憶を捏造してしまう日本の東洋史学、中国史学とはいったい何のため誰のためのものなのか。

批判の第2は、「崇高なる政治スローガンと残酷非道な実態」との本書副題が象徴する、歴史と人間に対する一知半解である。崇高と醜悪のはざまで生きる人びとは、日々堪え抜いた憤怒を到来した革命の

なかで解き放ち、徒党を組んで、ときに無私の精神、自己犠牲の精神を発揮し、歴史をつくってきた。「文革大年表」が明らかにしているとおりである。理想（崇高）と現実（非道）などという俗耳に入りやすい高みからの後知恵評ではなく、「反省を繰り返す学問」というからには「崇高なる政治スローガン」のなかにどのように「残酷非道な実態」が表れているのかの分析がなければ無意味である。

「烏合の衆」がいかに歴史創造の主役に変貌するのか、「群衆」の「集合心性」を歴史学の立場から考察したG・ルフェーブル『革命的群衆』は「革命的心性や革命的結集体は本質的に破壊的」であるが、「合意の上に成り立つ純粋なタイプの自覚的結集体は、反対に枠組と指導者を自ら生み出す」「革命運動の創造的な力を理解しようとするなら、まずもって集合心性を手がかりとしなくてはならない。実際、新しい指導者に、不可欠の権威を付与するのは、まさにこの集合心性なのである」と強調した。政治やスローガンが本質的に悪なのではない。政治やスローガンは人びとを崇高にし醜悪にもするのである。

あれほど大規模で長期にわたった人びとの社会運動を、本書のように全面否定しうるのは、歴史を「局外」から見おろし、民衆を歴史の主役と認めていないからではないか。文革を批判し否定する共編共著者たちは、ならば当時、どこで、どのように文革を批判し否定して闘ったのか。

殺された卞仲耘の夫、王晶堯は卞仲耘虐殺をめぐる事実をあますところなく記録することで闘った。遇羅克は、保皇派紅衛兵による「親が英雄なら子は好人物、親が反動なら子は大馬鹿者」という出身血統主義を批判する冊子を配布して全国の造反派紅衛兵運動の「新しい指導者」となったが、中国共産党中央の陳伯達らの折衷主義による裏切りによって弾圧され、1970年3月5日、処刑された。遇羅克の事績は、遇羅文の証言として、王による「受難者伝」出典である《網上文革受難者紀念園》に収められてい

る。しかし本書では訳出されず、「文革大年表」には処刑の事実すら掲載されていない。いったいなぜなのか。「文革大年表」が労作であることは確かだが、史観（立場と観点）が異なれば方法をいくら蓄積しようとも、何が主要で基本的な事実か、年表に記す項目はちがってくる。小林は、本書を「私たち戦後世代の中国史研究者の「墓標」であり、文革で倒れた同世代の中国人への「弔歌」であり、また私たち戦後の中国研究への「惜別の辞」と自称する。ならばなぜ、遇羅克を外したのか。小林は、かつて毛沢東と中国革命に心酔し「人類史上最初の壮挙のように感じ」（13頁）た自分自身を若気の過ちとして清算し、「階級闘争史や社会経済史中心主義から脱却して、むしろ精神史、倫理史に転換」（17頁）したところに、変質した自己を沈潜させた。かつての自由民権運動家が民権から国権へと変質し、また全共闘活動家がポツダム体制批判から天皇制批判抜きの護憲へ変色していったのと同様の運命を私はここにみる。かつて「プロレタリア文化大革命の「その志や壮なり」と感じ」（14頁）た小林が、革命を否定し運動の否定面を暴き立てようとも、資本主義の搾取と抑圧が止まないかぎり革命は押しとどめられない。

かくして本書は、「一〇〇万人に対する迫害、監禁と殺戮、これが文革の主たる情景であり、またこれこそが文革が行った主要な事実」（王、5頁）との立場から収集した口述記録は「人権を踏みにじり法制度を破壊する点において、文革中の毛沢東はスターリンに比べてはるかに勝っていた」（152頁）、「共産主義のユートピアは、ただ螺旋型のからくりを通して封建制の大復活に向かうことができるだけだ」（247頁）と文革を他人事として否定し断罪する。ここには自らの内面的理解としての「反省を繰り返す学問」はもはや存在しない。

「懐旧の哀詩がなく、斬新な行進曲もない」（魯迅）本書を貫くのは、歴史の「局外」からの後知恵である。中国の、そして日本の社会は、相変わらず「専門家」「優等生」が「素人」「劣等生」を抑圧する50年前の中国であり、日本である。1965年から81年までの「文革大年表」から読み取ることのできる本質と教訓は何か。文革を過ぎ去った他人事とみるのか、現在に生きる自らの「直面する現実の問題」とみるのか、問われているのは読者自身なのである。

『図書新聞』2017年5月27日付、第3304号掲載  
（まえた・としあき、神戸芸術工科大学非常勤講師）

#### 蔵出し批評

### 武満徹「中国の時」（1976年5月3日、『音楽の余白から』新潮社、1980年4月 所収）

解題・前田年昭

【解題】武満徹は1976年に訪中、時に着目し、文化大革命を「時間への科学的検証」「前例を見ないような大きな革命」と評した。沈黙（死）に対峙して音（生）を追究しつづけ、間を演出することにおいて国際的な音楽家であった武満の視野の深さを想う。本邦「中国研究者」の迎合と卑下、他方の蔑視と思い上がりをみるとき、恥ずかしいかぎりだ。書かれたのは林彪事件の5年後である。

いま、ひとつの旅を終えて、無数の事象が、新しい相貌で私の傍に在ることに気付く。旅はつねに消し難い痕跡を私の内に印す。そして、変化はただ私の内面に起きるのではなく、それはまた外界に起こるのでもない。変化は、私と事物との関わりの中に

あらわれ、個人において閉ざされ<sup>とど</sup>まるものではない。

中国で感じたものは、まさに万感であった。この旅行は、これまでの旅とは違って、空間的であるよりは寧ろ時間的な体験であった。

水桐の花が咲き匂う長沙で、発掘された漢墓の、地表に穿ちあげられた黯く深い穴にひき入れられそうになりながら、私は、直線的に発展するようなものとして把えていた時間というものが、ここでは層を成し、巨大な量として感じられるのだった。私は、時間を、定まらぬ過去から定まらぬ未来へ継起する、不安定な空間の拡がりのようなものに感じていたが、中国では、その時間は、物質的な知覚を伴って存在している。中国を理解するには、あの気も遠くなる

ような広大な風土と、この時間を知らなければなるまい。それは、「歴史」や「文化」という概念を超えて存在する何かである。

プロ文革についての私の理解は極めて低いものであろうし、また、中国の文芸路線において指標とされている毛沢東の延安での講話を正しく理解しようとも思わぬが、今日中国が行なっているのは、その時間への、科学的検証であるように思えてならない。

私は、訪れた地方の思いがけない空間で、屢々、厚く重い時間層を意識した。ひとつの過去は他のもうひとつの過去によって塗りこめられ、鶏血石に滲む赤い色彩のように、現在と過去は混沌の様相を示しているように感じられた。だがそれは、旅行者である私の傍観者としての視点であり、歴史の实在を現前にしながら、過去と現在を奇妙に混同するような過った感じかたであった。今日の中国の人々は、未来への確かな視点によって、時間を、真に多層なものとして認識している。それは、エドガー・スノウにたいして語られた、毛沢東のことばに表れている。

ブルジョア民主主義時代の人々が封建時代の人々よりも広い知識を持っていたように、長い目でみれば、将来の世代は、現在のわれわれよりも頭が良いはずだ。……地上における人間の条件は、この上なく急速に変りつつある。いまから千年もたつたら、マルクスもエンゲルスも、またレーニンさえもきっとバカげてみえることだろう。

——ユリイカ 一九七六年四月号、小野信爾「毛沢東と魯迅」よりの引用——

この、時間への醒めた知覚、あるいは超時間的な史観が、現実的な響きとして私たちに伝わるのは、この認識が、革命への沸々たる情熱に支えられ、闘争の現実のなかでなされているからである。

広大な風土に深々と根を下ろし立つ時の柱は、永いこと人々を自由にしなかった。人々は時の壁に封じこまれ、政治は、現実を過去に塗り替えるだけのものだった。解放以前の中国では、人々は、時の使用人でしかなかった。だが、いま人々は、この重くのしかかる時の主たろうとしている。古いものに新しい光を照射し、それを未来に役立てようとしている。古いものを今に役立てる、という毛沢東の思想

は、たんなる目前の援用を意味するものではないだろう。彼の理念は、前出のエドガー・スノウへのことばからも感得されるように、揺るぎない眺望に支えられている。

だが、過去の偉大な文化を今日に役立てるということは、それほど容易なことではない。中国は、いまその緒についたばかりである。それはあいまいな時の塊を、生きた人間の時間として把えなおすことであり、その過程において、人々は、階級矛盾とは別の、連続と非連続、全体と個というような大きな矛盾と戦わなければならない。だが、その矛盾こそは、革命を永続させる動力であり、中国の時を、重い石棺から解き放つものであろう。

いまでは私たちは、「批林批孔」ということばを何ごともないように口の端にのせているが、この四文字の間に横たわる二千数百年の時について、考えてみたことがあるだろうか。

私は、雲崗の石窟寺院で、あるいは長沙の馬王堆漢墓からの出土文物を目にして、また、七絃の古琴によって奏される凡そ千七百年も昔の古曲を聴きながら、私の周囲に渦巻く中国の 때가、一瞬にして現実に佇立し凝固するのを感じた。そして私はいま、あのような高い芸術的価値によって充填された中国の時を考えながら、それによって却って、あの前例を見ないような大きな革命のことを理解しえたように思った。

新しく創作された音楽作品を聴いて、そこに、試行錯誤と矛盾を感じる場合も少なくはなかったが、進歩的な教育制度、聴衆のあの厳しい批評態度等を考えると、革命的な政治的内容と可能なきり完全な芸術的形式との統一、という理想は、決して実現不可能な夢ではない。中国にはそれを可能にする土壌、あの眩くような中国の時がある。そして中国は、あの偉大な時のなかでの永い睡りから、目覚めたのだ。

私たちは多くの新しい音楽を聴くとともに、古代からの伝統的な楽曲、また、各地方の民俗音楽等を聴くことができた。しかも、それらが稀有の名演によって再現されたことはこの上ない喜びであった。そして、それらがたんに古い価値としてではなく、今日の中国にとって価値あるものとして保存されている現状に、実は、驚嘆したのだった。 ☆